
境界線上の機巧(人形遣い)

機甲魔人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界線上の機巧（人形遣い）

【Nコード】

N3704Y

【作者名】

機甲魔人

【あらすじ】

・・・重奏世界に支配された時代、極東の航空都市艦”武蔵”の中にある武蔵アリアダスト教導院、そこに在籍する、冬樹・A・直貴、彼はこの世界で何を目指し何を目的として生きていくのか。

プロローグ（前書き）

（アスラクラインとのクロスオーバーのつもりですが基本、機甲魔人しか出さないのでアスラクラインのキャラは出ませんので読むなら了承をお願いします）

注意：この作品は素人が書いたものなのでそこまで追求しないようにお願いします

プロローグ

何が何だかわからなかった、理解できなかった

目の前で起こった悲劇に、何も分からずに立っていただけだった

思考は働かずただ立っていただけ、何もできない何もしない

目の前に倒れている少女、自分と同じくらいの年だ

なぜこんなことになったのかもわからずその場に立ち尽くし現実から離れようとする

だが少年の目はその少女をとらえて離さない

周りでは少女を助けようと大人たちが騒いでいるが、自分の耳には入らない

心配した大人の一人が話しかけて来るが立っている少年は目を大きく開き倒れている少女を見続け数時間はその場に立ち尽くしていた

その後、倒れていた少女はもう二度と大地を踏むことは叶わなかった。と云う

その時少年は目に涙を浮かべ地面に倒れこみその顔を涙で濡らし、誰にも聞きとれない声でつぶやいた。

「僕が止めてさえいればっ！彼女は死なずに済んだのにつ！僕がっ
っ！」

この日、改めて少年は後悔と絶望を味わった瞬間でもあった。

主人公設定

主人公： 冬樹・A・直貴（副長代理）

年：17

呼び名：直ちゃん／直君

武器、アスラマキナ機巧魔神Ⅱ？鉄・翡翠・白銀・薔薇輝・亜鉛華・蒼鉛・鋼・
玻璃珠、翠晶

人物像：容姿はアスラクライン（アニメ）の一巡目の夏目智春をも
とに目は両方とも黒いが機巧魔人を使用する際紅くなる（アスラク

ラインで言う、悪魔の目）になる、現在、副長代理を名乗っている理由は副長になるのがいやだったらしく仕方なく副長代理に。

家族はおらず酒井学長が武蔵に左遷されると同時に彼に拾われた。拾われた当時以前の記憶がない、そのまま彼の義理の息子に

性格：結構乗りが良く、梅組のクラスのみんなとは結構仲がいい（ときどきキレて暴走するが）

ペットのシャーリーをとてもよくかわいがる姿は結構かわい
かなり変態チックな面もある。点蔵をいじるのが好き

酒井学長以外彼の武器のことは知らず葵・トリーと同じ何もできない無能者だと思われる。

実際機巧魔人が使用できるとわかったのはホライゾンの事件の後すぐであり、そのことに絶望しあまり人前で使いたがらない

後悔通りの事件の記憶、そしてホライゾンの記憶がなく思いだそう
とすると頭痛が走る、そのたびクラスや周りの人々は彼のことを気
遣っている

浅間・智のことが好きで話も良くするのだが何故か告れずお友達以
上恋人未満名状況が続く（しかし相手もまんざらではない）

ペット・シャーリー

呼び名・シャーリーちゃん／氷ちゃん

能力、一瞬で半径500mを凍結させるプレスを吐く

アスラクラインに出てくるシャーリーズをもとにして、大きさは鷹位直貴が酒井学長と会う前から一緒に行動していた氷鳥、直貴の言うことは何でも聞く、どこで会ったのか、どのような生物なのか、興味本位で聞いたり（直貴の命令で攻撃するときも）すると嘴でたたかれる（結構いたい）

プレスを使おうとすると直貴に止められる

なので戦闘にはよほどのことがない限り参加せず、伝令などの使いで飛ばされるが

設定集 1 (前書き)

書き直した

設定集 1

主人公のステータス

浅間神社経由で歌の神、フローディアの加護を受け歌を歌うことにより自分の持っている排気量を一時的に倍加したり、ステータスを一時的（大体3曲で1時間）にあげることができる。

しかし、連続しての使用はできず、本人も歌の趣味はあるが術式は使用しようと思っではない

アスラ・マキーナ装着時

装着状態での武力は通常時のおよそ3倍、だが蒼鉛の槍、白銀の太刀、薔薇輝の鎖などはそのアスラマキーナにならないと使用できない

なお魔神相剋者の能力を使うと、一定時間の排気消費率が低くなり、アスラ・マキーナの能力値が1段階上がり
特殊ケース（鋼）の場合シャーリそのものを取り込みその身にまとわせることで氷雪系の攻撃方法などが増える

強化符：人体の筋肉を活性化させ、筋力、瞬発力など身体能力を上げるもの

防御符：ほとんど機巧魔人の護法障壁で守られているためほとんど使用しない。（保険）

回復符：機巧魔人の鎧や直貴自信の傷や体調を癒すもの（結構傷つくので）

設定集 1 (後書き)

ちよつとヤバかったのでこっちに書き換えた

武器の用途（前書き）

この小説での機巧魔神アシラマキナの使い方を示しているので見てください

武器の用途

本来、機巧魔神は召還（呼び出すという意味では「召喚」だが、「アスラマキーナ還」の字が使われている）に依じて「演操者」の影を介して出現し、ハンドラー演操者の命令に従って動くと示されているがこの小説では2つの使い道を考えている。

1：アスラ・マキーナ本来の使い方である召喚し演奏者の命令で動かせる遠距離操作型としての使い方

利点：破壊されても一定以上のダメージは演奏者にはいかない。
大きさは大体”武神”位を想定

悪点：エネルギーをかなり消費し、操作しているときは派手に動けない

2： アスラ・マキーナを召還するのではなく自らの鎧としてま
とわせる（つまり直貴自信が白銀になったりする）。

利点：直貴の身体能力が上昇し鎧となったアスラ・マキーナの能
力が使用できることで戦術幅が広がりがつ必要なエネルギーが減少
する。

悪点：遠隔操作よりも危険で直接ダメージを受けるのでダメージ
が大きすぎると最悪死ぬ確率の方が上がる

本来アスラ・マキーナを動かすには副葬処女が必須だがこの小説で
は副葬処女の代わりに直貴自信の拝気（3600エーテル）を利用
し操作する。このため一度に出せるアスラマキーナは最高で三体で
あり、操作できても最高で（3体fullに出すと、1時間が限界）
でありそれ以上の使用は直貴自信の生命にかかわる

（在る条件を除き）

武器の用途（後書き）

とまあチートくさい設定にはしましたがこれはもうこの小説を読む
際仕方ないと思って我慢してください

次からいよいよ本編です

第1話 始動（前書き）

素人の作品なんでテンプレになっちゃうかもしれませんがよろしく

第1話 始動

．．．．．夢を見ていた．．．過去の夢だ。

だがなぜだろう霧がかかってうまく前の光景が見えない。ただその霧の中に進もうとすると頭が痛くなる

ズキン．．．ズキンっ．．．心臓の鼓動みたいに疼く

何なんだ．．．あの向こうに何があるってんだ．．．ッ！！

痛みが頂点に達すると地に片ひざを打ち付け、大きく息を吐くがその体は汗でぬれていた

そこへどこともなく自分に語りかけるように声が聞こえてきた、頭痛のせいですべて聴き取れは出来なかった

「・・・力欲・・・、我・・・名・・・べ、さ・れ・・・力・・・よ
う」

頭痛の中声の主を探そうとするが霧が濃く何も見えない。ついに力
尽き目を閉ざしてしまった。

「ッ!・・・夢・・・か、しかしずいぶんな夢だな、最近になってこ
んなのはっかだ。ったく」

俺こと冬樹・A・直貴はある屋敷の一角の布団の上で目が覚めた。
水を飲もうかと側のペットボトルを取ろうとすると目覚まし時計で
ある者に目がとまった

・・・時刻は・・・8時・・・28!?

「やっべ、遅刻したらあの女教師何すっかわかったもんじゃねえぞ」

思った瞬間と同時にそばに畳んであった制服をするすると着替える
と居間に置いてあったパンを3個ほど手に取り外に出た

出ると立ち止まって口笛をふくと太陽光を背に氷の翼をはばたかせ
こちらに近づいてくる物体を見るとニヤツと笑った

「シャーリーッ！、おはよう、悪いんだけど梅組の連中何処にいる
か探してきてくんね」

焦った様に頼み込むとシャーリーは首を”こくん”とうなずかせて

再び空へと飛び立っていった。

その少し前、梅組のみんなは、武蔵アリアドス教導院の前の橋の上に集合していた。

橋の上で長剣を抱えている、黒い軽装甲型のジャージを着た背筋を伸ばしている女性、梅組担任のオリオトライ・真喜子は笑みを浮かべながら

「休んでるの、誰がいる？ ミリアム・ポークウは仕方ないとして、あと、東は今日の昼にようやく戻ってくるって話だけど他は？」

するとマルゴット・ナイトと呼ばれる背中に6枚金翼をはばたかせている金髪の少女が笑いながら

「ナイちゃんが見る限り、セージュンとソーチョーがいないかな、あと直ちゃんも」

その声に彼女の腕を抱いている黒翼の少女、マルガ・ナルゼが首を傾げて答えた

「正純は小等部の講師行った後、酒井学長を三河に送って行くから自由出席のはずだけど、総長と副長代理は知らないわ」

「そんじゃ、トーリと直貴のこと知っている人」

そう聞いた瞬間、帽子を深くかぶった少年点蔵・クロスユナイトが

手を挙げ

「直貴殿は、おそらくいつもの寝坊ではないかと」

答えると梅組のみんなそろってうなずいた。真喜子はその答えに苦笑いを浮かべ

「まあトーリもそうだけど武蔵の総長と副長代理はこうでなくっちゃね」

（歴史再現の名のもとに極東を分割支配している今、聖連の都合によりトーリや直貴見たいな最も能力のないものが選ばれる）

（それに、直貴は……自分の力を表に出そうとしないしね）

でもまっとうと軽く下を向き笑うと

「君たちこれからどうしたいかわかってる」

と軽く挑発するように言うと、梅組の連中はそれにこたえる。その答えに納得したのか真喜子はうなずくと

「じゃあルールは簡単品川のヤクザの事務所に着く前に先生に攻撃を当てれば出席点を5点上げる」

そういつと全員の目がぎらつき授業が始まった。

視点変わって直貴はシャーリーが来るまでゆっくり歩いていた。教導院に向かって

持ってきたパンにかじりつき今朝の夢を思い出すそうと考え顔を苦くしていると空からシャーリーが下りてきて、ついて来いと言うように頭の上を三回周ると品川方面に飛んで行った。

その行動に笑った俺は歩くのをやめシャーリーの後を駈け出した。

俺はその方向が品川方面だと気づくと、確か先生が最近ヤクザに地上げに合い、飲み明かした末、教育機関から叱られたという事実を

思い出し苦笑いを浮かべた

「あの先校、体育の授業にかこつけて自分の恨みはらすってのかよ、なんつーかな・・・」

走ってシャーリーの後を追っていくうちに俺は頭の中でどうやってみんなの前に顔出すのかを考えていた。

「うーん、どうやって登場するか・・・前回みたいに空から派手に登場するか、それとも”白銀”の能力使って空間切断して相手の背後に移動してびっくり登場するか・・・迷うな、うん」

うーんと頭をうねっているうちに品川には着いたがどうやって登場するかは結局決まっていな

困った、困ったと思いながらみんなを探すとシャーリーが方に乗って来て前に声を上げる、その方向をみると何故か魔人族とたたかっている自分の担任が見えた

「おっ、やってるやってる……ふむここはやっぱり空から派手にいくか。やっぱりかつこよく決めて浅間さんに……でへへ」

と妄想の世界に入る、肩のシャーリーは自分の主人のにやけきった顔をみて溜息をこぼしていた

そして魔人族の後頭部に剣を叩きつけて脳震盪を起こさせ倒した。その光景を見ていた俺は思わず拍手をしてみた。

小さな拍手だったので気づかれる心配はなかったが登場のタイミングを逃してしまったぜ。

さてどうするかと考えるとそこに総長兼生徒会長の葵・トーリが来た。何か持っていたが気にはしなかったのでこっそり聞き耳を立てていたが

「明日、俺告ろうと思うんだ」

と一瞬耳を疑うような発言を聞き軽くふいたが、すぐに持ち直した聞き耳を立てた。

「愚弟誰に告るのかゲロしなさいっ！さあっ！」

と茶色いウェーブのかかった巨乳の姉ちゃんトーリの姉、葵・喜美が叫ぶが

「きまつてるだろ、ホライゾンだよ」

・・・ドクン・・・ドクン・・・

ホライゾン？・・・誰だ？それ・・・いや知っている・俺はホライゾンと呼ばれる少女を知っている？

思い出せない・・・誰だ！誰なんだ！

考えていくうちに頭痛がひどくなり軽く倒れこんでしまっがなんとか持ち直しみんなの方へ歩いていき自分がみんなに視認できる位置まで行くとオッドアイの長身な少女、直貴が恋焦がれている浅間・智が直貴に気づき近づいてくる、浅間が駆け出すとみんな直貴に気づいたのか手を振ったり声をかけたりしてきてくれるが直貴の様子がおかしいことに気づく

「直君？、大丈夫？」

と浅間が駆け寄ってくれるがさすがに限界かな、頭痛くて・・・

意識が・・・飛びそうだが

「大丈夫、大丈夫。ちょっと寝不足なだけだよ・・・」

と作り笑いを浅間に返し先生の所に向かうがやっぱりふらついちまうか浅間やみんなには心配掛けたくねえし。

「うつす、すみません寝坊しました。」

「いや、うん、大丈夫？すっごいふらついてるわよ？」

と真喜子もふらふらな俺を見て柄にもなく心配するが

「大丈夫、大丈夫、ちと頭痛がするだけだから・・・みんなおはようさん」

梅組の連中に挨拶するがやっぱり調子悪く見えんのかね、みんな心配そうに見るわ

その中からトーリが飛び出してきて満明の笑みで肩に腕を回してきた

「よう直貴、聞いてくれよ俺明日告るんだぜ・・」

・・・・・ドクン・・・・・

「まじかよ、で、我らが総長のトーリは誰に告んのよ」

やめろ
聞くんじゃない！

「えー、お前も言うのかよ、みんな知っているはずなんだけどな」

「いいから教えろよ……トリー……」

「きまっているじゃないか」

．．．．やめろ．．．．やめてくれ．．．．

「ホライゾンだよ」

その瞬間、より激しい頭痛に襲われ倒れてしまいそうになるがトーリに支えてもらいなんとか持ち直した

いきなり倒れかかったので真喜子や鉾の連中が駆け寄ってくるが手を前に出して止めさせた。笑って「大丈夫」と答えるがどう考えても大丈夫ではない

「わり．．やっぱやばそうだから、家に戻るわ．．．午後になったら顔出すわ」

直貴の応答に真喜子はうなずき「一人で平気？」と言っが

「いざとなったら力使っつて．．．悪いな。先生」

と言つと来た道を引き返し帰ろうとするがやっぱりふらつくか

「・・・・・・・・・・ホライゾン・・・・・・・・誰なんだ、一体」

その時彼がこのホライゾンという名の少女をかけた戦いに決して人前で使わないと誓った力を使うなど思ってもいなかった

おまけ

これは午後に聞いた話だがあの後トーリのやつ真喜子の胸揉んで閉

まっていたヤクザの事務所に突っ込まれたって軽く笑っちゃった

第1話 始動（後書き）

結構頑張った

第2話 告白（前書き）

一気に書くと疲れるんだな

第2話 告白

体調不良で家に戻った俺なんだが……何故か頭痛も治まり回復していた

やべーよな……今更学校戻ったってやることないしな……うー
んどうしょ

ソファーの上で頭を抱えてころころころ転がっていると誰かが
家に訪ね

「誰だよ？新聞の勧誘ならおこと！？」

誰だろうと思ひドアを開けるとそこには自動人形でありこの航空都
市艦”武蔵”の艦長でもある自動人形武蔵さんが目の前に立っていた

（つーか、武蔵の艦長だから武蔵さんってもうちよっとなねるよ）

「なにか？」

うおっ！心が読めるのかよ、侮れんな武蔵さん

「思いつき顔に出てますが・・・酒井学長が話があるそうなので
急いで来るようにとのこと・・・以上」

「親父が・・・解りました、どうもありがとね、あとなんで武蔵
さんが？普通なら奥多摩さんが来ると思うんだけど」

「jud、それは酒井様、直貴様のつけを今奥多摩が居酒屋に払い
に行っております。まったく親子そろってダメダメですね。・・・
それでは失礼します・・・以上」

「あはははは、・・・すみません、以後気おつけます。」

武蔵さんは艦橋の方へと戻って行った。 ” もう二度と来ないで下さい ” と言いたかったがその言葉は

心の内に取っておこうと言わなかった。

まあ

あの嫌味つけたつぷり自動人形のこととはともかく呼ばれてんなら顔くらいは出すかね

「シャーリー、行くよ」

シャーリーが俺の肩に止まるのを確認すると、一緒に親父の所へ向かった。

教導院前

そこでは梅組のみんなが集まって何かを話している何を話しているかは俺の距離からは聞こえない

（あそこで待っていれば親父も来るだろう）」

そう考えると

みんなの方に向かって手を掲げながら走って行った。みんなも走ってくる俺に気付いたみたいだ。

「よう、何やってんの？」

と聞くと、眼鏡をかけた少年トウ・サン・ネシンバラが眼鏡をくい

って上げて

「葵くんの告白を成功させよう会議だよ、ところで直貴君体調はもういいの？」

やっぱりみんなも聞きたかったのか首を振ってくる。軽くこのクラスみんなに涙の感動をもらったような感じがする

「大丈夫、しっかり休んだしな、でトーリ、どうやって告白するんだ」

階段の前列に座っていたトーリに視線を合わすが、本人は難しい顔で

「わかんね、点蔵告白ってどうすんの、お前回数だけ多いだろ」

「確かに点蔵は数え切れないほどの告白技術を持ちかつ毎回振られている驚異のレコード保持者だからな」

「なんか自分に対する言い方きつくないでござるか！？、しかもいろいろと否定されてるで御座るな！」

「だって事実だろ」

「はもった！？はもったで御座るな。それだったら直貴殿！直貴殿だって浅「殺れ、シャーリー」・・・って、痛い、痛いで御座るよ、つつくのは痛いので御座るやめてくだされ！」

余計なことを言おうとした点蔵にシャーリーの鋭いくちばしの突き攻撃が連射する、もう点蔵のHPは30もないぞ、さあ倒してレベルアップだ

「三人とも真面目にやってください」

「「「ごめんなさい」「」」

やりすぎたかな？、結局ネシンバラに怒られた。シャーリーは浅間の膝の上で頭をかいてもらっている。・・・・・・正直うらやましい

「んで結局どつすんの？」

トーリが点蔵に聞くと点蔵は懐から手帳とペンを出し得意げに

「ここは手紙作戦などいかがでござろうか」

「でだ点蔵その作戦が失敗したのはいつだ？」

「そうあれはちょうど3年前の……って！、なにを言わせるで御座るか……みんなも引かないでくれで御座る！」

「直貴君」

ネシンバラに怒られた。後一回でレッドカードだから注意しよう

そして軽く落ち込んでいた点蔵は帽子を深くかぶりなおし

「気を取り直して、簡単に御座る相手に伝えたいことを箇条書きとしてメモに書きそれを手紙として相手に渡すので御座る」

「うーん、うまく書けるかな、難しいな〜」

まあそれはな、っと言葉を発する前に橋の上で端に寄りかかっていた喜美トーリに近づき直貴が言葉をかける前にささやいた。

「フッフ愚弟、とりあえず直貴の良いところと点蔵のいやなところを書いてみなさいよ」

突然自分の名前を入られた直貴は逆に喜美の問いに考え答えた

「エッ俺の良いところか、点蔵のいやなところなら思いつくだけでも10個位在るけど自分のはわかんねえわ」

嘘りつけ無しの100%の言葉を正直に漏らした。点蔵は直貴を指さすと軽く怒気を含んで言った。

「酷い、酷いで御座る！。そんなこと言うのであれば浅間殿にあることないこと吹き込むで御座るよ」

茶道部でシャーリーの毛づくろいを笑顔でやっている浅間の方を向きながらとんでもねえ事言いやがった。

お前がそう来るならこっちだって、と思いながら懐から手帳のようなものを出すとにやりと笑って

「ならお前の持っているエロ本の中でお前のお気に入りt o pの5冊燃やしちまうぞ」

「フツ甘いで御座るな、拙者そうそう簡単なところには・・・」
「ク
ラスのロッカーの一番左空いているはずなんだけどなんで閉まっ
てんのかな」・・・」

点蔵の体から大量の汗が噴き出してきて一瞬で水たまりになってしまった。そんな点蔵の肩に手を置くと

「ちなみに暗証番号は俺が変えたんで俺「やで御座るな直貴殿拙者がそんな人を陥れるようなことをする筈がないで御座るよ！」」

フツ勝った。甘いぞ点蔵我の知らぬ事はないのだ。

「まあ点蔵の嫌がらせはもう飽きたからいいとしてトーリとりあえ

ず彼女の良いところを箇条書きで書いてみ」

「え」と

顔がかなり好みでうまく言葉にできない

しゃがむとエプロン裾からインナーがパンツみたいに覗けてうまく言葉にできない

ウエストから尻のあたりのラインが抜群でうまく言葉にできない
結構やっぱり難しいなこれうまく言葉にできないや」と

「って随分詳しい箇条書きで御座るな！」

いや点蔵の言うとおり確かにかなり詳しく書かれていると思うが・・・
しかし、何か足りないような？

「ちょっと待てトーリに関しては、重要なことが抜けているぞ」

と言ったのは半竜であるウルキアガが顎をなでながら言つと

「おっばい県民であるはずのトーリが相手に対するおっばいの言及を忘れている」

ウルキアガの答えに梅組のみんなだけではなく下校中の生徒までも立ち止まった

俺も驚きのあまり手のひらに拳を”ポン”と置いてしまった。

「確かに、でトーリなんて書くんだ？」

トーリが頭を抱えて考えた結果

「おっばいは 揉んでみないと 解らない 季語どうしようっ。」

短歌と言う形で決まった。軽くずっとこけたが、まあトリーらしいっちゃらしい

「つまり愚弟、あんたはオパーイに対していい加減なことではできないのね」

「ああそうさ姉ちゃん！俺って真面目だから」

俺もさすがに突っ込めない、確かにおっぱいは好きだが・

「でも愚弟あんたの歌通りだったとしても、大体の所見ればわかるんじゃないの、浅間なんか見た目そのまんまだし」

葵姉がそう言つと茶道部の窓から顔を赤くした浅間がシャーリーを

胸に抱いたまま顔をのぞかせてきた。

「こらー！！勝手に人の体ネタやらない！なんですか見た目まんま
つて」

確かに浅間の胸は大きいよなーと考えながらだんだんと妄想を膨ら
ませ・・・・・・・・・・・・・・・・

「直貴君・・・・・・・・やっぱり私の胸変かな」

と旨を強調し近づいてくる浅間を妄想、もとい想像してしまったせ
いかやばい位に心臓がバクバクだ。

しかもそんな姿を喜美（葵姉）は一部始終見ていて舌なめずりする
と直貴を指さし

あゝら直貴今いったい何を想像したのかしら。まさか、浅間の胸を
見てなんか想像してた？」

悪い笑みを浮かべてとんでもない爆弾発言をしやがったこの女。

浅間の方を向くと目が合ってしまいどんどん顔が真っ赤になり目を向けていられなかった

「なっ、直君のエッチ、スケベ、点蔵見たい」

と浅間は顔を真っ赤にしたままシャーリーを外に離すと窓を閉めてしまった。

浅間の発言を直接受けた直貴はと言うと・・・地面に両手をついて、エッチ、スケベ、点蔵より酷くないのに、を連呼しながら涙を流していた。

点蔵も（拙者もう嫌で御座る）と体育座りで床に指で丸を書いていた。

「・・・？貴方達、こんなところで何をしていますの？」

いきなり校舎側から声がかかった。その場にいたもの全員が振り向くとそこには二人の人物がいた一人は猫背でキセルを蒸かしている、この学院の学院長でもあり、直貴の義理の父親である酒井・忠次そしてもう一人は銀色の髪でくるくるヘアーでもあり、金色の瞳でキツとした顔つきの少女、ネイト・ミトツダイラであった

すっかり親父である酒井に呼び出されていたことを忘れていた直貴はショックから立ち直ると酒井の前に立ち、軽くめんどくさそうに口を開いた。

「親父、用ってなんだ。わざわざ武蔵さん使って呼び出したんだからよっぽど大事な用事なんだろ」

直貴がめんどくさそうに問いかけると、顎を手でさすりながら軽く笑い

「まあな、お前さん俺がこれから三河に降りるのは知っているだろ」

「ああ、確か松平四天王でもあった旧友に呼び出されたんだろ」

「そいつのことだ。でだ、そいつらにお前のこと話したら一緒に連れて来いって言われちゃってな」

酒井の発言に軽くばカーンと口をあけてしまったがすぐに

「……はあ？、なんで、なんで俺？と考えるがやはり酒井忠次の義理の息子だからか？と考える」

「まあそう言うこつた、でだ一緒に来るか」

酒井はキセルを蒸かしながら聞いてくるが俺はちょうどいい暇つぶしだと思った。……元信公にも会えるかもしれないからな

「jud 行くよ。三河四天王つてのも一度拝んでおきたいし」

「よっしゃ、んじゃあ行くか、確かあつちには本田・二代つていうお前と同じくらいの年頃の子もいるからな。俺の見立てじゃ……結構期待していいかもよ」

オヤジ臭いこと言ってんなよと軽く言いながらもにやりと笑い

「けどまっ！ラッキーじゃあ気があつたら一緒にデ……」

その言葉を最後まで言う前に俺の頬を高速で矢がかすめていった。
後3cm近かったらお陀仏的な距離に

脂汗を噴き出し、顔は真っ青になりながらも、ぎぎぎつと音を立てながら後ろを向くとニツコリとした笑顔を浮かべながらこちらを見ている浅間がいた。確かに顔は笑っている、うん笑っているね、でも絶対怒っているよね？だってオーラが見えるもん。うん赤い。

そしてその手には弓がしっかり握られていた、もうしっかりと第2射が撃てるように

みんなの方も啞然としてるし、親父もキセル落して茫然としている

ぶるぶる震えながらも酒井の方を向くと咳を2回ほどして

「親父……俺がそんな事を期待するわけないからねえか……はははは……はは……はは……」

酒井の方も殺されかけた自分の息子と矢を撃った少女がいたであろう窓を交互に見て軽く苦笑いをする

直貴に「行くかと」言った

うなずいてこの場を後にしようとするが立ち止まりトリー達の方を向くと

「ああそうだ、これから三河に入る際に正純に送ってもらうがなんか伝言あるか？」

直貴は前を向きながら言った。トリーの声が背中に響く

「じゃあ俺が明日告ることと、今夜騒ぐから来れるか聞いて」

「jud・jud」

片手をあげる答えると親父と一緒に学院を後にした。

「あれ？なんで浅間はおそこで怒ったんだろ？もしかしてフラグ立った？」

その後夢のような事実をしゃべりだす直貴であった。

おまけ

浅間 side

「なんで私、彼のこと撃ったんだろう？ 後なんでこんなに胸がドキドキするんだろう」

浅間は心臓の部分に手を添えると顔をほんのり紅めてつぶやいた

第2話 告白（後書き）

フラグ立っただー！

結構いけるかしんねーこの小説

第3話 三河（前書き）

いよいよ三河です

第3話 三河

武蔵を降り三河の街道を歩いている影が3つ、一人は猫背でキセルを咥えた酒井忠次

武蔵の制服を羽織り肩に体が氷の様なもので覆われている鳥、シャーリーを乗せている冬樹・A・直貴

そして同じく男子の制服を着て、体は細く、長髪の少女、本田正純であつた

「……ってことだ正純、夜に騒ぐから来れるかだど？」

俺は横にいた正純に前を向きながら聞くが、正純はため息をつくとこちらを向き

「行けるわけないだろ、校則違反だ！」

「まあ予想通りだわな、その回答・・・はあ」

苦笑いで軽く笑った俺はその後軽くため息をついた、その様子に正純も気付き言葉をかけようとするが酒井がそれを肩をたたくことで止める。

それを察したのか、正純も声をかけるのをやめた。

「しかし妙だな・・・三河からの荷はあっても武蔵からの荷がない・・・」

その言葉に俺も周りを見渡した。通っているのはほとんどが空だ

（・・・確かに少ない、いやむしろないに等しい・・・どういう事だ。）

「・・・まるで三河が死ぬ前の形見分けをしているようですね」

おっかねえ事いうなこの女、まあ的を得ているわな

直貴が苦笑するとすぐ上の上空を数隻の船が通るその船を見ると直貴は嫌な顔をした

「K・P・A・Italia 所属教皇総長インノケンティウス所有するヨウムガンダ級ガレー”栄光丸”」。

そして護衛は三征西班牙の警護隊……か、教皇総長のやつ何しに」

「大罪武装の武装開発の交渉だつてよ……」

直貴の質問に酒井がキセルを蒸かしながら答える

……大罪……武装か……なんかやだなこれから戦争始まるみたいで……

しばらく歩くと三河の境目に入り正純は証明書を受け取って武蔵にもどって行った。

しばらく森林地帯を歩くと鳥居が見えてきてそこに三つの人影があった。

一人は、中年過ぎの細い男

一人は体格のいい大柄な男

最後の一人は二人の背に隠れて見えなかったが少女であることはわかった

おそらく彼女が二代だろう、きれいな黒髪でいい女だと一瞬思ってしまった

心の中で浅間に軽く誤り、頭を振り前に立っている男達に注目した。

こっちの方は一瞬見ただけで軽くひるんでしまった

この大きな気は本田・忠勝だろう。おそらくかなりの使い手だと想像がつく

「おや、松平四天王のうち榊原・康政と本田・忠勝がお出迎えとわ

ね・・・井伊はどうしたよ？榊原、ダっちゃん」

酒井の言葉に榊原と呼ばれた初老が顔を上げる

「それがな、酒井君、井伊君が」

「井伊については他言無用だ、榊原」

言葉を発しようとする榊原を本田・忠勝が止める

榊原が口を迷わせ再び酒井の方を見ると、うなずくと同時に口を閉ざした。

代わりに本田・忠勝が一步前に出て

「見せろ」と言った。

その瞬間後ろに控えていた本田・二代の姿が消え、瞬間酒井の後ろに現れ腰に控えていた剣を抜き酒井に振りかぶるが酒井も懐にあった短剣を抜き合わせている、がさらに二代は消え右に回り込んでいる見たところ、少女が立つのは右肩前、こちらに対して背中を見せるように、腰は落し気味で存在している。

どういう理屈かは分からないが、確かに少女が移動したのは確かだ。瞬時の移動が出来ると言うのは事実だ。

その理由は分かるが・・・今はそんなことを考えている余裕わない！

直貴は空間を切り裂き異空間に待機してある機巧魔人、白銀の太刀を手に持ち、間に入ろうとするが

酒井はニヤツと笑うと一瞬で勝負が決まった……我ながら突っ込みたくなる。

短刀の柄から手を放すと、手放した手を目の前の少女、

その背と刀の間に差し込み左尻へと手を伸ばす。そして振りかぶってくる二代のお尻に手をぺたつと

その瞬間彼女の口から驚きの色を含んだ叫び声が響いた

同時に剣を持って間に入ろうとしていた直貴も一瞬酒井の行動に驚き

「……は？……羨ましい……ッ！じゃなくて！？、何やってんの！親父！！」

その場で酒井はケラケラと笑いながらナイフを腰にしまった。呆れた直貴も白銀の太刀を影に戻したがその一部始終を本田・忠勝に見られていた。

その後、場所は三河郊外、二十畳程度の、厨房とカウンターを持つ店、酒や軽食を出す食堂だ。

入り口は木のテーブルや椅子が並ぶが、奥の繁盛は畳敷きになっている。この主はその畳敷き、

そこに胡坐をかいて座る一団の中から発していた。

ここで何故かさつきから飲んだくれの親父共が食ったりしている。その中で目を細め横目でじーっと酒井忠次を見ている直貴、そんな中酔っている忠勝が

「しかしなんだよ、酒井お前昔と同じように戦闘の最中に相手の尻さわるか!？」

「あのなフツ―久しぶりに会った偉いご友人様に娘ぶつけるか? 二代だっけ、強くなったもんだし美人になったもんだ。俺がもう30年若かったら口説いてたね」

スケベ発言しすぎだろ親父! 二代の方も軽く赤くなり「恐縮です」と言った

すると忠勝も顔を赤くしたまま娘はやらんぞつと言ってるかのよう
に二代を手で隠す。

榊原の方は黙々と酒を飲んでいる。

すると二代のが

「父上、改めてご紹介を、それとあちらの青年は？」

何故か親父の後に俺まで見られたので一瞬”きよとん”としてしまった。するとそくだそくだと言いながら全員の視線が俺に向く。

「あ、俺、酒井・忠次ね。君のお父さんよりマジ偉いから。俺と君のお父さんは地元組みで、

そっちの榊原と、ここにいない井伊は、小四からの編入組み。三十年前だっけ、武蔵アリアダスト教導院が武蔵に出来たとき、こいつら他所から入ろうとしたんだけど入れなかったの」

「あの時期は、アリアダストが開放的であることを示すために異国人の編入を第一としてましたからな。

私や井伊君は神州のために編入を辞退したまでです」

「うわ言い訳上手いねえ。ともあれ学生時代は殿先生、——元信公が学長兼永世生徒会長だったから俺総長で、君のお父さんが特攻隊長」

確かに特攻隊長ならさっきの気は解るな、この親父が総長ってのは信じられんけど

飲み物を一気に飲みながら直貴は心の中で笑ってしまった

特攻隊長と呼ばれた本人はそれが聞こえず酒井の方へ反論を飛ばしていた。

「副長つて言えよ馬鹿野郎。今でも三河の特例として聖連許可の特殊予備役副長だぞ」

「無視するけどいいよね。んで、井伊が副会長で、この榊原がまた口先だけの男でなあ」

「口先……」

榊原は麦茶を飲んでいたが、二代の視線を受けると慌てて手を振り、

「べ、別にそんな事はなかったのですぞ！書記で、文系としての能がありましたしな！」

そうだったけなあ、とオヤジが二人声をそろえて懐かしそうに思い出す。

「確かに文系能力あったよなあ、榊原。学園祭のとき、罰ゲームでお前が小等部の卒業式集に書いた詩、

”明日の某ら”を朗読したの、あれ結構ウケてたしな、——我だけに」

「だよなあ、今となつてはいい思い出だね。小等部のときさ、教導院の四階から下に重りつきの癪癪玉投げてよく遊んだよね？

パンって音がして、窓から下見たら下校中の榊原が頭から煙上げてうつ伏せに倒れてたりしてね。

いや、今でもよく覚えてるわアレ。気絶した人間って腕とかダラ

りしてるんだよね」

「……訂正こいつらやっぱアホだ……」

「で酒井よ、そっちの小僧がお前の」

「ああ忘れてた、俺の息子の直貴だよダツちゃん、今武蔵の副長代理だぜ」

自分の息子忘れるなよと軽く悪態をついてから麦茶を飲み干す

「お初にお目にかかります、酒井・忠次の義理の息子、冬樹・A・直貴と言います、東国無双、本田・忠勝殿にご息女の二代さんにお会いできて光栄です」

と軽く警護を混ぜながら挨拶したが、本田・忠勝は首をかしげると

「ちょっと待て、確か武蔵の副長代理は戦闘能力ゼロのダメ人間だと聞いたぞ」

「……カチン、ダメ人間ってなんだよダメ人間って……」

「けどよお前、さっき二代をつっかけさした時、西洋風の太刀を持っていたよなありやなんだ？」

忠勝の言葉にギクリと体の中で音が鳴った。酒井はその話を聞いて

「お前！力を使ったのか？・・・あちゃしまったなこりゃ・・・ダツちゃんこいつの能力はよ、わけありでな・・・知っているだろ10年前の事件、あの後に発現したんだよ」

忠勝は10年前の事件と聞くと覚えがあるのか”そうか、わかった。”と言うと詳しくは聞いてこなかった。

酒井が仕切り直しに二代の方に向くと

「ダ娘君も、そろそろ体育会系オヤジの洗脳解ける年頃でしょ？反抗期でしょ？」

うちの教導院来ない？ 君みたいなの、かなり欲しいなあ俺。本多・正純もいるよ？ 覚えてる？」

”失礼だろう”と軽く肘をつき小声でしゃべるが全く気にしないように物欲しそうな顔で二代を見るが

「正純とは武蔵へと見送って以降、あまり顔を合わせておりませぬが、今はなにやら副会長になっているとか……」

「そうそう、だからさ・・・後、今来るんだったらこの直貴を君の好きにしていよ」

その発言に直貴は飲んでいた麦茶をブーっと噴き出し、二代の方は頭に？を浮かべている。

「おっ！親父！、冗談もほどにしてくれ！？、第一、俺には浅間がつ・・・」

それ以上言葉が出なかった。親父の顔がニヤリと笑ったからである。こんな時はろくなことがない！

そこに本田忠勝が口をはさみ、酒井の意識は直貴からそれたので、直貴はホッとして胸をなでおろした

「待て、酒井、今二代には三河警護隊の総隊長を任せている。」

「へえ、極東で防衛的対外闘争が聖連から許されている三河警護隊の総隊長か。

歴史再現に制限されて銃とかまだほとんど持てないけど、接近戦や遭遇戦なら結構いけそうだね」

「興味あるか、お前のとこの武蔵、三河からだけは露払いとして警護隊の先行艦がいつも出るであろっ？

—— 今回の先行艦は二代が管理する。安芸まで行って戻る際だが、そこからは好きにやれと言っておいた」

「好きにとは——」

その問いに忠勝が答える。

「全部自分で決めろって事だ。だから、そのときに誘え。こいつら

が武蔵やお前を必要だと思ったら、そっちに加わるだろう・・・これから先、世が動く。——子供ぐらいは、好きに動かしてやりてえもんだ」

父親としては最高だなと見直してしまった俺だが、時代が動くと聞いてそろそろ力隠し通すのも限界かと思ってしまった。

「そうか、東国無双本田・忠勝が認めた逸材が旅立つか、既に西の大友では”西国無双”の名を襲名した立花・宗茂は各地を転戦し、様々な敵と戦い戦果を挙げているって聞いたからな」

・・・西国無双、立花・宗茂一度だけ見かけたことがあった確か神速の異名を持ち今じゃ大罪武装を持つ八大竜王の一人だっけ

二代の方を見るとギュツと手を握り締めている。おそらく苦やしんだろうな

そんなことを思っていた時酒井が声を上げる。

「——結局井伊が来ないようだが、どうしたんだ？」

「井伊君は——」

「井伊は、所用で出ていてな」

「……極秘か？」

Jud、と、忠勝が言ったとき、そのとき遠く、店の外から足音が響いてきた。

二代が足音の主を見た

「——鹿角様」

「Jud、」

答えが帰ってき、座敷の入り口で足を止めた侍女服姿の自動人形が現れたのを忠勝と酒井が見る。

直貴は誰？と首をかしげている

耳の上から生える黒の角を見た酒井が手から中型徳利を落とし

「げえ、鹿角——！」

「Jud、——下らない。どなたかと思えば酒井様ですか」

こちらへと顔を向け、半眼の視線を向ける。

「左遷からのこのこと、こんなところにやってきて若い未来ある少女に対してサービスもせず酒飲みとは、大した大人だと判断します。二代様、早くお屋敷にお戻りを、それとその方は」

鹿角が未だに首をかしげている直貴に視線を向ける。

「これは失礼を、自分酒井・忠次の義理の息子で冬樹・A・直貴と申します以後お見知りおきを」

挨拶をすると鹿角は目を見開き

「……本当に酒井様の息子様ですか？とてもそうは見えないほどのきれいな言葉使いで……申し遅れまして、私、本田家の自動人形鹿角と申します。お見知りおきを」

「……なんかすっごい言われようだけど、ダッチャン、十年前と同じで相変わらずこの女、ダッチャンのどこ？」

「しょうがねえだろ。こいつが一番女房の味も剣筋も再現できるし、礼儀作法だってちゃんと教えられるしな……」

失礼、と鹿角が一礼をとると

「忠勝様、船の準備をお願いします」

J u d・J u d・とめんどくさそうに忠勝が立ち上がり、その動きに続いて二代が立ち上がって一礼をし

「——では、我らはここまでだ。この先、しっかりやれよ」

そう言って出てゆく四人。榊原、酒井と共にその背中を見送りながら横に立つ酒井に問う

「親父悪いけど、ここら辺周ってきていいか？」

「別にかまわねえが、ここら辺は怪異とか発生してるから気をつけろよ」

「大丈夫、いざとなったら助けてもらうさ」

自分の足元を叩きながら酒井に言つとそのまま駆け出して行つた。

残された酒井も苦笑を浮かべながらその後ろ姿を見送つた。

その後、彼が記憶を取り戻すなど今は誰も想像はしてなかった

第3話 三河（後書き）

次は俺の一番書きたかった話

第4話 崩壊（前書き）

さあーお待ちせいたしました
今回と次回2つに分けてお送りします

第4話 崩壊

現在：午後5時50分

三河郊外の森林に一人の男の姿が見えた。

武蔵アリアダスト教導院の制服を着た男・漆黒の瞳と漆黒の黒髪の少年・・・・・・・・直貴である

直貴は森の中で草木が生えている場所をただじっと見つめていた。

「ここで、俺は、親父に拾われた・・・・・・・・ここからすべてが」

「そうだね……ここから君のすべてが始まった」

「っ！、誰だっ！！」

当時の事を思い出す中、突然響き渡る声、こんな郊外には自分しかないと思っていたが予想外の反応に身構えた。

その声の主は現れた、そう、眼鏡をかけた学帽付きの黒の長髪の男が3体の自動人形と一緒に歩いてくる

その男を見た瞬間反射的に膝を折ってしまった。

「お久し．．．ぶりです．．．．松平・元信公」

そうその男はこの三河の、いや極東の明主でもある男、松平・元信本人でもあった

「やあ久し振り、元気そうでよかったよ直貴君、本田君から君が三河に来ることは聞いていたからね」

「恐縮です」

挨拶をし終わると立ち上がり目の前に立っている元信に向かって質問をする

「元信公は何故こんな所に？確かK・P・A・Italiaが大罪
武装の開発の交渉で来ている筈ですが」

「うん、でもそんなことはどうでもいいんだ。ここに来たのは、君
に話があつてね」

驚いたK・p・A・italiaの交渉より自分に会いに来たとい
う事実

だが何故？自分と元信公はあまり会ったことがない。武蔵に住むた
めの手続きをしたときくらいだが

「自分に？、それでご用件は？」

「うん、10年前の事件の事についてね、君はどう思っているのか
と」

ドクン

心臓がはねた、まるでその先を聞くと言っているように

「10年前、私が武蔵に行った時、私の乗っていた馬車が事故を起
こし一人の少女の命をなくしてしまった」

・・・ドクン・・・・・・ドクン・・・・・・

止まらない、元信公の話を耳をふさいで聞かないようにしたいが手が動かない

体が硬直し徐々に目が開かれていく

「あの時君はその少女をじっと見ていたね、まるで自分が殺してしまったかのように」

・・・ドクン・・・ドクン・・・ドクン・・・

やめてくれ・・・やめてくれ！・・・

直貴の顔から汗があふれ、瞳孔は開き目を大きく開けている。はたから見れば話をやめるだろうが元信はやめない

「そう事故で死んでしまった少女、ホライゾン・アリアダストとよく遊んでいた君達が」

そう元信公が言った瞬間過去の記憶がフラッシュバックの様によみがえる

10年前の事故の事、そしてホライゾンと呼ばれる少女の事、

そくだ……。なんで忘れていたんだろう……。あの笑顔を、そし

てその笑顔を失わせたのが直接ではないにしろ自分であるという事実を

「ホ・・ライ・ゾン」

その場に崩れ落ち涙を流す直貴に元信は笑みを浮かべ彼の耳元で囁いた

「でもホライゾンが、本当は今生きていたとしたら、君はどうする？」

「……………えっ！？……………今何て？今何て！なんていったこの人は！！」

「元信公！？今何て……………！」

その言葉は最後まで発することはなかった。元信公の連れてきた自動人形が直貴の首筋に手刀を容赦なく打ち込み気絶させられたからである

直貴は反撃する暇もなく気絶するが、かすかに元信の笑みが見られ何かをしゃべっているようにもみえた

「真実を知りたければ、私のもとに来るがいい。時間は・・・・・・・・・・
・・そう残されていないよ」

そう元信の言葉を最後に直貴は意識を絶った。

気づいたのはそれから2時間位たってからであった。

重い体を起こしなんとか立ち上がると頭を揺らし現状を確かめる。

すると地面が揺れているのに気づいた。

「地面が揺れている！？地震？いや、違うこれはもっと奥深く地の底からきているような揺れだ、・・・・まさか！？地脈が暴走しているのか！？」

その時、元信公が去り際に残した言葉を考えると、予想は出来た、
だが

「馬鹿げている！？、こんなことを起こして三河全域を吹き飛ばすつもりなのかあの人は！」

唇を噛みしめそして最後に名古屋城の方角を向くと一目散に駆け出

した。

「教えてもらうぞ元信公！、あんたの知っている真実を！」

s i d e i n

同時刻、武蔵では地脈炉崩壊など想像もつかず、トリー率いる梅組のせいで校舎は半壊の危機にあった

「しかし遅いで御座るな直貴殿、そろそろ来るころかと思つたで御座るが」

点蔵は帽子を深くかぶり隣にいたウルキアガに話を振った

「確かに直貴は遅いな、一泊するまでもないのにこんなに遅くなるもんなのか？」

ウルキアガがみんなを見通してみるが誰もわからないというように首を振る。

「確かに遅いね、直貴君の事だからこっちに帰ってきて一緒に幽霊払い遣るかと思ってたんだけど」

ネシンバラが答えると、小柄な太った少年、御広敷・銀二が

「小生、少し心配で御座るな、ここ最近三河では怪異が起こりやすいでありますから」

その言葉に一人だけ過剰に反応した少女がいた、長身の黒髪をなびかせ三河を見ていた浅間・智だ

神社の娘だけあり怪異の事は多分梅組の中でも一番知っている

「……直君……大丈夫、だよね」

その瞬間三河で爆発が起こった。ネシンバラがおおよそその地形から加賀三原の番屋だという事実が解った

「事故かな？」

と後ろにいた、端末をいじっていた長身の男、シロジロ・ベルトーニに軽く振ってみた

シロジロは端末をいじるが

「商工会に問い合わせたが返事がない」

と言っただけで何も分かんないままだった。

すると突如空中に梓が出現し三河の明主、松平・元信が映し出され

『今日、先生は、地脈炉がいい感じに暴走しつつある三河に来ていま——す!—!』

いきなり嬉しそうな顔で喋り始めた。

だがそれだけでは終わらなかった。名古屋城の周りも軽く写されそこにいた人物に梅組のみんなは驚愕していた

「今日は特別課外授業として西国無双、三征西班牙第一特務、立花・宗茂君と」

「……なんでそこにいるの？……ねえなんで！」

浅間の声が響く中スクリーンに出されたもう一人の観客

「極東武蔵、副長代理の冬樹・A・直貴君がきています」

s i d e
o u t

第4話 崩壊（後書き）

いよいよ、三河編クライマックス

直貴はどんな決断を

第5話 眞実（前書き）

三河最終章

第5話 真実

アリアダスト教導院制服を着た黒髪の少年は戦闘が在ったのか、橋などが崩れている国道沿いを走っていた。

もうすでに新名古屋城からは光の塔が伸びており、それが少しずつ崩れかかっている状態だ。

急がなければ三河が消滅する！

直貴は顔に汗を噴かせ走っていた、体力的にはもう限界だろう、だがここで諦める訳にはいかない

元信公に答えを、何故三河を消滅させようとするのかを問わなければ！！

しばらく行くと三征西班牙の部隊であろうか戦闘によってやられた負傷者を保護していた

（正直、ほつとくのは気が引けるが時間がない）

直貴は救出部隊の目を盗み、新名古屋城に着くとそこには2人の人物が対峙していた。

2人も駆け込んできた直貴に目を向ける。

一人は槍をもち自動人形を首から下げている男、本田・忠勝と鹿角と呼ばれた自動人形

もう一人は

「長身に、短い金髪、三征西班牙の教導院の校章の刺繍、そして・

」

男の握っている武器には一応見覚えがあった

「全長一メートル強の黒白の剣、特徴としての尻側の剣砲、大罪武装の一つ、悲嘆の怠惰か！！

すると西国無双、立花・宗茂か！」

宗茂は突然現れた直貴を目を見張って見回し、武蔵の制服と昔見かけたことのある面影から

「武蔵副長代理、冬樹・A・直貴君ですね。お久しぶり、数年ぶりですか、とのん気にあいさつを交わしている場合ではありませんね」

と軽く直貴に会釈すると本田・忠勝の方に己の武器の剣先を向ける

俺も忠勝の方を向くが持っている武器に警戒レベルを上げた。

「神格武装”蜻蛉切”刃に写った物の名を取得することで活断をなす武器か!!」

俺の声に”よく知っているな”と声をかけてきたので苦笑いで返した

「でオッサン、こいつはどう言うことだ、何故三河を消滅させようとしている!!」

「知らねえな、だがよ三河の持ち主はそれを望んでいるらしいぜ」

(・・・やっぱりか)

予想道理の回答に逆に絶句してしまった直貴、そして”あり得ない”と思っている宗茂だが後ろの名古屋城西門が開いていくのが見えるとそっちに今度は氣を向けた

そしてその向こうにある新名古屋城の西側外殻の正面口も開いていた。

その中から見える光、地脈統括炉はすでに四方の抽出炉の暴走が完成し、流体が蓄積していた

「あの光の塔が全部内側に落ちた時、統括炉の許容量をこえオーバーロードを起こすってことか」

「その通りその通り。なんとかここまで来たよ。止めるなら後5分くらいじゃないかな？その立花君と直貴君はどうするつもりかな？時間は有効的に使っていないかな」とな

直貴のつぶやきに名古屋城の外部拡声器から声が聞こえる。宗茂と直貴はその声を探すがその主は統括炉の前に立っていた。

そう、そこにはさつきと格好の変わらない学帽付きの白衣姿、三河君主松平・元信が立っていた。

元信の姿を見るなり直貴はその男の名を叫んだ。

「元信公!!」

「はいそこ、これから授業が始まるんだよ？生徒はちゃんと静聴しないかね」

対する元信は先ほどと変わらない捉え所の無い返事を返し自動人形が持っているカメラに向かい。

「ようし、じゃあ全国の皆！　こんばんはあ——」

「今日、先生は、地脈炉がいい感じに暴走しつつある三河に来ていま——す——！」

とてもうれしそうな声で叫んだ。

「今日は特別課外授業として西国無双、三征西班牙第一特務、立花・宗茂君と

極東武蔵、副長代理の冬樹・A・直貴君がきています」

自分の名前が呼ばれた瞬間に憎悪が募った。だが元信はしゃべるのをやめない

「立花・宗茂君だね？遠路遙々課外授業にようこそ！じっくりと見学していつてくれたまえ」

「課外授業・・・・・・・・？」

観客の一人となっていた宗茂に声をかけ

「ああ、——地脈炉の暴走による三河の消滅だよ。最高の教材だと思わないかい？」

宗茂の疑問がおかしいのか笑う

「どうだい？課外授業としては最高だろ？」

さらに俺の中に憎悪がたまった。

世界の各地、人々は、身分などに関係なく、神肖筐体^{モニタ}や神啓筐体^{レディオ}から、元信の言動を見聞きしていた。

彼は光に満ち溢れた地脈統括炉を背景に笑顔を作ると、

「どうだい地脈炉暴走、さあ、三河の消滅を見てみたい人は元気良くジャンプして左手を挙げなさい」

その自分のセリフに対し、元信は一回軽くジャンプして左手を挙げ、
こう叫んだ。

「……………はい——い！！ばおく見たいで——す！」

誰もが予想外過ぎる展開についていけず、置いてけぼりをくらって
いる中、数百体を越える侍女服姿の自動人形達が動き出す。

彼女達は、元信の言った通りずっと右手を挙手したまま通路の左右
に展開する。

そして、その間を身をシェイクさせながら宗茂達の方へと歩き出す。

さあ、と小首を振る彼の姿は少し身構え、何が起きてても対処できる体制でもあった

「——さあ、さあさあ！」

そんな事はお構いなしに元信と後ろに従う侍女達は次の行動に移る。

自動人形は各々が笙、横笛、太鼓、和琴といった幾つもの楽器と加^ア圧^シ機を構え、

「――！」

尺拍子の打ち音と同時に調律を行う。

奏でられる多重の音色と音圧は、中央の元信の左手が指揮棒であるかのようにその手に沿って変化する。

「・・・・・・！」

その手が、握られ、振り下ろされる。

と、同時に

『——通りませ——』

楽器の伴奏に合わせて無手の侍女達が口を開き、奏で歌った。

通りませ 通りませ

行かば 何処が細道なれば

天神元へと 至る細道

御意見御無用 通れぬとても

この子の十の 御祝いに

両のお札を納めに参ず

行きはよいなき 帰りはこわき

我が中こわきの 通しかな――

通し道歌であった。それも、ホライゾンがよく歌っていた歌でもある。

その瞬間、頭に頭痛が走り左手で顔を隠すが全員元信公の方を気にしているため気づかない。

元信が新名古屋城の入り口に至るまでの間、音楽は伴奏状態で続き、声は、あ、の音を響かせ続ける。^{コーラス}

地脈の鳴動すらも、今や音の一つでしかない。

「ハイいいですかあ！？この歌、これから末世を掛けた全てのテストに出ます（配点：世界の命運）。じゃあ皆さん、先生に何か質問はありますかー？」

直貴が手を上げようとするがその横で素早く手を挙げた者がいた

立花・宗茂である。

手を挙げるように言われ、右手と共に”悲嘆の怠惰”を挙げ

「元信公！ 一体、何のために、地脈の暴走と三河の消滅を行い、極東を危機に陥れるのです！？」

直貴や誰もが思っていた事を代弁し

「ふむ、いい質問だね。では、逆に問うてみよう」

元信は

「危機って、面白いよね？」

その質問に宗茂の隣にいた直貴は全く動けずにいた。

何を考えているんだあの人は！・・・危機って面白い！？、もう無茶苦茶だぞ

直貴は腰が抜けそうになるが、怒気をはらんだ顔の左目をを左手で隠しながら元信をにらんだ。

「危機とはとても面白いものだ。だけでもっと面白いものがあるよね？ ハイ、じゃあ今度はその直貴君、もっともっと考える必要があるもの、答えて御覧」

自分に問いをかけてきた元信に向かい吐き捨てるように

「わかんねえよ！、あんたが言ってることは無茶苦茶だ、危機以上の面白さってなんだよ！わかんねえよ」

「うん、口は悪いが良い答えた」

元信は直貴の拒絶に近い答えにそう答えた。

「解らない。そうだよな、解らない。その通りだ
ではそれは何故？簡単だよ考えなかったんだ、危機より恐ろしい
ものがあるのかと、君は考えるのを避けた。人間としての当然の行
為だ。悪い事なんぞ考えたくもないんだから」

元信はそう答えた後に直貴を見下すように”だが”と言葉をつづけた

「君は危機より恐ろしいものを前にした時、目をそむける人間だ。そう、10年前のあの事件の様に」

その元信の言葉に言い返しができなかった。彼の言ったことは事実だからだ。俺はホライゾンの事件から目をそむけつつけていたからだ。

「大丈夫かい、直貴君？」

「jud 大丈夫だ」

肩を下ろし無気力になっている直貴の肩に宗茂が左手を置き心配してくるが、そっけない返事で返し元信を睨む。

「では、答えだ、危機、……極東の危機より恐ろしいものは、ただ一つ……」

そう、末世だよ……この世の滅び。それはこの全世界に対するエンターテイメントだ」

俺はその言葉についに解らなくなった。……末世「エンターテイメント」だと考えているこの人にだ

「この世の滅びが最高級のエンターテイメントとか、何考えてんだあんだ!？」

直貴は元信に向かって叫ぶが、元信はその答えに笑みを浮かべ

「そうだ、考えに考えに考えて、末世を覆せる答えを出した者には御褒美をあげよう。それは末世を覆せるかもしれないものだ」

「「な！？、末世を覆すだと」」

この世の終わりを覆せるかもしれないと言つ元信の言葉にこの光景を見ている者がその話に聞き耳を立てる。

何時の間にかマイク片手に立ち止まっている元信が、直貴を見て微笑む

「そして直貴君、君の求める真実でもある、よく聞いておきなさい」

その瞬間俺は今まで以上に感覚を研ぎ澄ませた。

（・・・元信公がこれから話す10年前の真実・・・俺は・・・）

宗茂も直貴の肩から手を外し武器を構えその言葉に耳を傾けた。

「——大罪武装」

「大罪武装を手に入れたものは・・・末世を左右できる力を手に入れる。」

爆弾発言をした。

「ちょっと待ってくれ、確か大罪武装を配ったのはあんたのはず、それを集めろって!!、あんた自分の言ってることわかっているのか!？6つの国に戦争を吹っ掛けることだぞ!」

「jud、解っているとも」

「だったら先生の話はちゃんと聞かなきゃだめだよ、直貴君!!」

元信のそっけない言葉に齒をくいしばるがここは最後まで聞こうと黙り込む。元信は直貴が黙ると全世界に向け

「それに配ったのは6つの国ではない、7つだよ」

宗茂と直貴はぞっとした。

配ったのは確かに6つの国のはずだそれなのに何故!?

「確かに大罪武装は8想念がモチーフだが、その8つの想念にも原板が在り、実は9つだったりする

「な！？も「元信！！貴様あ！！」つつ！」

元信の衝撃の事実^に反論をしようとするが入ってきた通信越しの声に邪魔をされる

それはK・P・A・Italiaの教皇総長が所有するヨルムンガンドガレー”栄光丸”^{レニヨ・ユート}艦橋の中央に立つ、白の教皇衣を着た男がスクリーンに写っている元信に吠えた。
教皇総長インノケンティウスである。

「8想念を論じたエウアグリオスは実は、友人に対する書簡で9つめの悪について述べているんだ。8想念に含まれていない、その9つ目が”嫉妬だ”」

「エウアグリオスは何故“嫉妬”が8想念に追加されず、そうして後に、グレゴリウス一世はこれを大罪に数えられる事になったのか。解るかい？知ってるかい？大罪にはそれぞれ神代の時代の魔獣が当てられているけど——」

そう、と元信は画面越しのインノケンティウスに向かい叫んだ

「“嫉妬”に当てられた魔獣は、——レヴァイアサン全竜だ!!」

8想念の魔獣について、直貴は何も知らなかったもので、元信とインノケンティウスの話にはついていけなかった。

インノケンティウスは座っている椅子の肘かけを思いっきり叩き元信を睨む。

「——全竜とは、全ての化け物の様相を持つ史上最大の竜！つまり貴様はこう言いたいのだな！？九つ目、嫉妬の大罪こそが、全ての大罪をまとめたものであり、最高の悪徳なのだ！」

『そうそう、すべての罪、暴食、強欲などは何かを嫉み、何かになりたいと願う思いの行き過ぎや、その反動によるものだよな。先生が思うに、エウアグリオスは、その大罪の存在を露わにするのを恐れ大罪に含めず、逆にグレゴリウス一世は、嫉妬に新参のイメージを与えるように追加することで、その存在を卑小化して伝えようとした、だが、やはり人々はそこに全竜を見たよね』

「ならばその最後の大罪武装は何処にあるんですか!?!」

直貴は今まで以上の声で元信に問いただす。

「今、全竜は、すでに存在しているよ」

元信は笑みを濃くした。

「君は、噂を聞いたことがないかい？」

「・・・噂？」

ああ、と元信は呟いた。

『その噂はこういうものだ。——大罪武装は、その材料として、人間を使用している。ゆえに、人間の原罪をモチーフとした能力を使用出来るのだ、と』

（確かに聞いたことは在ったが人の感情を武器にするなどあり得ないと思っていたから無視したが、

まさか!!！）

直貴はその答えを予測したが、それは”あり得ない”と本能で感じ取った。

だが元信は話を続け

そして、

『それは本当だよ？実際に大罪武装は、人間の感情を部品としている』

実演を残して、元信は最後の授業の解説を始める。

『その人間の名は、ホライゾン・アリアダストという』

その名前を聞いたとたん俺は何かの聞き間違いだと思った。だってその子はもうこの世には存在している筈がないからである。

だが、森林であつた元信の言葉を思い出す。

（でもホライゾンが、本当は今生きていたとしたら、君はどうする？）

「バカな！！そんなはずは！？ホライゾンは確かに！！」

「いや、死んでいなかったのさ。いや体は死んでいたが心は死んではいなかったからどうなんだろうね」

（嘘だ・・・じゃあ、彼女は・・・だが、例え生きていたとしても何故彼女は、トリー達に会いに来ない！）

だが、元信の話の続きによって、その疑問は打ち砕かれた

そう

その感情が、一瞬にして我を失わせるほどに。

「ホライゾン。十年前に私が事故に遭わせ、大罪武装と化した子の名だ。そして去年、彼女の魂に嫉妬の感情を込めて九つ目の大罪武装とし、自動人形の身を与えて武蔵に送った」

（!!!!!!????????.....嘘だ.....
何故だ！）

「その自動人形は、P・O・I・Sという名を持って、武蔵の上で生活をしている」

（何故だ！！・・・何故だ！！）

『自動人形、P - 01 S、その子の魂が、
オロス・フノーツ“嫉妬”の大罪武装“焦
がれの全域”そのものだ。』

（何故！！！！！！・・・）

「これが大罪武装の正体と、九つ目の大罪武装の在処だよ

そして

これが君の求めていた真実と言つ名の回答だ、直貴君！、ホライ
ゾンは生きているんだよ！！！」

「ふざけるなあアアア！！！！！！！」

肺が破れそうなくらい、喉が潰れるくらい叫んだが、直貴の叫びは
止まらない

「あんたは！、娘を自動人形にして！、感情をなくさせて！、なん
とも思わないのか！！！」

「・・・・・・・・ああ」

『今日、ホライゾンを見たよ。・・・・・・・・手を振ってくれていた、久しぶりに娘を見たよ』

（黙れ！！・・・・・・・・黙れ！！！！）

『ホライゾン、娘は・・・・・・・・元気なようで、・・・・・・・・何よりだ』

「黙れEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE！！！！」

直貴は体をくの字にし下を向き怒気を上げる。その声に宗茂も忠勝も今この場を見ている者たちはただ黙って聞いている。

俺は震える声で叫んだ。元信に届かせるために、すべての怒りを込めて

「あんたがホライゾンの名前を口にするな!!」

俺の中にいる人形が目を覚ました。演奏者の怒りに応えて目を覚ます。

「あんたが俺の気持ちを知ったかぶるな!!」

力に応えて直貴の瞳が紅く変わる。

「武蔵の……俺たちをあんたのゲームに巻き込むな……!!」

その拳は握り締めまっすぐ立ち元信の瞳を見据える。その顔は怒気に包まれ、

「あんたに……、娘を道具のように扱うあんたに……ホライゾンを娘と呼ぶ資格は無い……!!」

その瞳は紅く染まりきっていた。

「では、君はどうしたいんだい？」

「あんたを止める!!」

俺は元信の行いを許すつもりはなかった。だからと言って簡単に死なせようとも思っていなかった。

「力のない君がどうやって私を止める？」

元信の質問はこの場にいる忠勝以外全員が思っている事だった。

無能と呼ばれた武蔵の副会長代理は戦うすべを持つはずがないと

だが、その考えは否定されることとなる。

「力なら……あるさ、今、この場にな……！！！！」

（親父……ごめん……！！）

俺は自分の中で父親である酒井に謝やまると、腕を高く上げ叫んだ。
自ら封印した我が力の名前を……！！

「出ろ、機巧魔神 - 翡翠……！！、目覚めろ、薔薇輝……！！、開演だ、
蒼鉛……！！」

直貴が叫ぶと同時に彼の影が広がり3つに分かれる、そして影の中から

透きとおった淡緑色の魔神と薔薇色の魔神、暗蒼色の魔神がその姿を現す。

この光景を見ている者たちは言葉を失っていた。この場にいる立花・宗茂と本田・忠勝も

さつき画面越しに介入してきたインノケンティウスも、教導院にいる梅組のみんなも

この魔人を見てその言葉を失っていた。

だが一人だけ、この光景に笑みを浮かべている人間がいた。

元信は魔人を子供のように見回すとその間に立っている直貴に視線を移す。

「まさか君がそんなものを隠していたなんてね。……じゃあ、もう一度だけ聞こう」

君はどうするかい？」

その答えに俺は確固たる意志を持った返事を叫んで返した。

「あんたを止める……！」

その答えに元信はさらなる笑みを浮かべ

「良い答えだ、その立花君はどうする？」

宗茂は元信の答えに武器を構えることで答えた。

「良い答えだが、それではちょっと困るので、その副長ちよつと
どうかしなさい」

直貴と宗茂は後ろの本田忠勝を見る。

「「本多・忠勝・・・・・・・・！！」」

「
おつよ

「止めるぜ学級崩壊!!」

こうして三河最後の夜が今、始まる。

名古屋城に駆けこもうとする直貴に本田・忠勝がはいりこむが、立花・宗茂が神速で忠勝とぶつかり合う

「あの方は、私が押さえます!!、貴方は元信公を!」

「だが・・・・・・・・わかった、無事で」

「貴方も」

返事を返すと、俺は翡翠の腕に乗り名古屋城を目指すがかけようと
する前に直貴の方に銃弾が3発飛んでくる。

その銃弾は薔薇輝が前に出て腕の鎖で撃ち落とす。その余波で砂煙
が満鋭する。

（っち！？どっからの狙撃だ）

考えるがこの砂煙の中前がまともに見えない。

そこに今度は剣が1本、薔薇輝に、もう1本が翡翠に向かって振り下ろされる。

2体ともつさに張った語法結界でなんとかしのいだがあはれは・・・

煙がはれるとそこには自動人形しかもそれぞれの容姿やスタイルの違つと自動人形がそれぞれ一本ずつ重力制御で作り出し持っていた。

「どうだい、彼女たちは、鹿角や他の自動人形のデータを基に作られた武闘派自動人形だ、君の相手はちょうどいいと思うが？」

行きたまえ、春香、夏海、秋葉」

「「「judd」」」

「っち！、迎え討て翡翠、蒼鉛、薔薇輝！！」

刀を構えた3体の自動人形がそれぞれ機巧魔人に向かって振り下ろされる。

翡翠は氷弾を放つが重力制御により作り出された壁に次々と防がれてしまい、そのすきを狙いあちらも剣を3本に分けて飛ばしてくるが翡翠は氷の壁を作りだしそれを防ぐ、

薔薇輝は3本の鎖を鞭のように使い、追いつめるが自動人形も巧みに剣を使ったり、重力制御で作った盾を展開し軌道を変えて、隙ができたその瞬間、空中で剣を銃に変え、長距離からの制圧射撃をしかけてくるが薔薇輝も空いた手を使い護法結界を張るなどしてそれを防ぐ

蒼鉛は槍を回転させ高速の突きを放つが自動人形も重力制御で作った双剣を使い、軌道を逸らしながら

ときどき剣を投的し新たに作り出すなどして対抗している

それらの攻防が数秒続くと、後ろから紫色の線が放物線を描き飛んでくるのが見えた

「あれは・・・悲嘆の怠惰の超過駆動か！！、だとしたら、もう時間がねえな！

翡翠！下がれ！！、薔薇輝！蒼鉛！10秒そいつらを足止めしろ！！」

演奏者の命に領くと、翡翠は演奏者のもとまで跳躍し、それを追撃しようとした自動人形は横から飛来した薔薇輝の鎖につかまり地面にたたきつけられる。

翡翠が戻ってくると同時に直貴は腕を組み目をつむると呪文を唱え始めた。

翡翠もそれに合わせて腕を前に出す。

「闇より静けき氷海に眠る―其は、科学の音色おとに凍てつく影」

呪文が唱え終わった瞬間、翡翠の手から高周波が放たれ地面を凍りつかせていく。

「今だ！！、下がれ蒼鉛！、薔薇輝！」

その言葉に反応し一気に後ろに跳躍する。それを追いかけようとした自動人形たちだが体が動かない

なぜなら、翡翠の凍結能力で胸の下あたりまでが完璧に凍りついていたからだ。

一気に決めさせようとするが後ろから大きな音が響き、地面が削られていくが地脈炉を外した。

「立花のやつ！失敗したのか！？」

「そのようだね、今回は時間切れで私の勝ちかな」

元信の声が響き渡り前を向き睨む

元信は睨みを気にせず笑うと直貴に向けてこういった

「直貴君、君はもう脱出したほうがいい、君まで巻き込まれることになるぞ」

「っ！ふざけ「最後まで聞きたまえ！！」！」

「君にその3体の自動人形を預ける、みんないい子だから、それに君にこんなことをお願いするのは悪いが

「……………娘を……………頼むよ」

元信の頼みに反論したくてもできなかった。元信の声が本気だったからである

「……ホライゾンには俺よりもっと良いやつが隣にいるさ。そいつが彼女を守り通すだろう」

自動人形たちの氷を溶かし、薔薇輝と蒼鉛を影に戻していく。元信の顔を見ずに後ろに振り向く、元信は安心したのか、もとの笑みに戻っていた。

「ありがとう、それじゃあ、これで最後だ、がんばりたまえ」

「……jud……」

自動人形たちに走れるか確認をとると翡翠の腕に乗り立花たちがいる後方へと戻って行った。

「彼みたいなのが……いれば、あの子も大丈夫かな」

立花たちが戦っていた橋は見事に崩壊しておりそこには傷を負っている本田・忠勝と気絶した宗茂を抱えている義手の少女がいた

「おう！坊主の方は無事だったか！しかし能力が無いと言われておきながら、そんなデカイ隠し玉持っていたなんてな。それに後ろにいるのは春香と夏海と秋葉か」

「jud 元信公からの名により、これより直貴様の侍女となります。」

ピンク色の髪をした自動人形、春香と呼ばれる自動人形が忠勝に元信からの指示を伝えた

直貴は忠勝の体には先ほど首から下げていた鹿角がない事に気付いた。

おそらく戦闘で消失したんだろうと考える

翡翠を影に戻しながら宗茂を抱えている少女の方に顔を向ける

「……立花・？さんですよ。お久しぶりです。解ります？俺の事」

彼女に問うと彼女は” t e s ”と答えた

「武蔵アリアダスト教導院、副長代理の冬樹・A・直貴殿とお見受けいたします」

J u dと軽く返すと暴走している統括炉を見ると一瞬溜息をつく。

・・・止められなかった・・・か。

今度は忠勝の方へ向くと

「結局失敗か、ここまで来たのにな。」

「残念だったな、ここはもうすぐ消える、お前さんらはとっとと帰

りな」

「言われなくともそうするよ・・・鋼！」

直貴は”鋼”という言葉を口にする、直貴の目の前の空間が裂ける

その行動に武装を展開し銃をこっちに向けてくる？と驚きの顔を隠せない忠勝、銃を展開した？と直貴の間に入り戦闘モードに入る、
春香、夏海、秋葉。

だが春香達を下がらせ、銃口を向けてくる？に”何もしねえよ”という言葉をかける、？も納得したのか、ここで戦うのは不利と判断したのか解らんが銃を納める。

「宗茂に伝えといてくれ久しぶりに会えてよかったと・・・、後、かわいい嫁さんに心配かけんなっていつとけ、うらやましい」

その答えを聞いた？は目を丸くし、顔を赤めながらtesと言った。

そのやり取りを見ていた忠勝が

「お前やっぱ、忠次の息子だわ」

”余計な御世話だ”と言うと空間の裂け目に向かって歩きながら手を振る。

「おっさん、元信公に伝えて、約束は守るってね」

空間の裂け目に春香達を入れてその後続いた。

「jud・jud、やっぱりあいつの息子だわ」

本田忠勝は2回目と同じ言葉をつぶやくと、名古屋城の方に向かっていった。

直貴達はちょうど武蔵艦の村山の丁度居住区画に空間を切り裂き降り立った

「ちっ！翡翠と薔薇輝と蒼鉛の遠隔操作に鋼の空間転移はちょっときついな」

ぼやきながら肩から息を吐き、春香に肩を支えられる直貴だが、周りの人はかなり驚いた様子で直貴を見ていた。

自分たちを指さしてくる人たちが何かあったのか？と思っていたと黄色の髪をしたお嬢様っぱいきれいな自動人形夏海が直貴の耳に

「おそらく、今まで三河にいた我々が、いきなりここに転移したからだと思われます・・・以上」

夏海の答えに納得した直貴

考えれば自分達の前にいきなり三河でド派手な戦闘を繰り返した人間が突然今自分たちの目の前に現れたのだ驚かない方がおかしい

自分を見ている人に直貴は軽く微笑むと春香達に先に家に戻っていると指示を出す。

明らかに俺の体調を気にしてそうだったから、大丈夫と言うと教導院へ向かおうと足を進めるが

少し向こうが騒がしく、三河の護衛艦が規則を無視して接近していることに気付いた。

何か嫌な予感がする。と呟くとそちらの方へ足を進めた。

しばらく歩いて行くとそこには三河警護隊の者、K・P・A・It
ariaの隊員たちだった

問題はそこではない、そこにはK・P・A・Itariaの隊員に
叩き潰され関節を取られている

梅組のウルキアガ、ネシンバラ、地面に倒れこんでいるノリキ、そ
して隊員に体を押しつけながらも

少女に手を伸ばし何かをつぶやいている、葵・トーリがいた

その先には同じ梅組の本田・正純と自動人形であろう少女、そう、ホライゾン・アリアダストがいた

トーリが何かをつぶやこうとするがトーリの上にいた隊員が帯刀してあった小刀をトーリに刺そうとする

その瞬間、刀の刃が先から消え持っていた隊員が吹き飛ばされ、トーリがいたところには土煙が立ち上っていた。

「なっ！何が起った！」

隊長らしき男がわめくがその理由は単純だった

そこには白い甲冑の様な物に身を包んだ直貴が立っていた。

「きつ！貴様！何者だ、こんなことをして聖連に逆らうつもりか！」

「はあ？何言ってるのあんたら？俺は友達に刺されそうになったから止めただけだよ」

「ふざけるな！貴様何者だ！」

「俺か？オッサンさっきの三河での攻防見てないのか？俺は

直貴は剣だけ残し白銀の鎧を解き素顔をさらした。

直貴の姿を確認したその場にいたすべての連中は驚いた。なんせさつき三河の自動人形相手にドンパチやったからだ

冬樹・A・直貴、この極東武蔵の副長代理だよ」

直貴は正純の方を向くと剣を持ち肩に担ぐようによる

「おい正純、説明しろ」

「おっお前！？なんでこんな、え？、確かさっきまで三河に、え？え！？」

「落ち着け、それについては後で話してやる、だから、現状を話せ、わけがわからん」

「あっああ、今聖連の命令で極東にある大罪武装、つまり彼女の回

収をしようとしたところ、葵達が来てまあさっきみたいに邪魔をしようとしてたから・・・」

「jud　つまりホライゾン連れて行こうとしたわけだ。」

「そういつことだ」

ふーん、とホライゾンの方へ今度は歩いていく、彼女を見回すがよく似ていると感心してしまった。

懐かしいな。ホライゾンも直貴の事をジッと見ている

そして、白銀を再び纏うと剣の切っ先をK・P・A・I t a r i a
の隊員に向ける

「わかった、うん非常に分かった……誰の判断だ？」

「我らが聖下、そして聖連代表であるインノケンティウス様である」

その名前を聞いた瞬間剣を構え、隊長らしき男に突っ込もうとする
が後ろから打撃を受けて気絶してしまった。

「間に合いましたか・・・以上」

「て・・・めえ・・・春香！！！」

直貴に打撃を入れ気絶させたのは先程先に家に帰らせた春香である

”お手数をおかけしました”というと一礼し、春香は去って行った。

白銀の鎧が解除され気絶したままの直貴は正純が体を脇に寄せて置いた

そして、意識の失った直貴は

・
・
・
・
・
・
・
俺は
・
・
・
・
・
守れないのか
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
俺は
・
・
・
・
・
また
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
俺は
!!

と無念の言葉を心の中で思っていた。

「ホライゾン！！！」

そう叫び起きて見るとみんな上の護衛艦を見上げていた。そこにはすでに連れて行かれた

ホライゾン・アリアダストの姿が見られた

その光景に10年前の事件がよみがえる

(・・・またなのか!・・・また俺は・・・)

立ち上がり立ち去っていく護衛艦に向かって走り、手を伸ばすが届かない、その手はもう

・・糞っ!糞!!なんで今度は救える力があつた!!機巧魔人が在ったのに!!

立ち止まり、天に向かって叫ぶ

「糞つたれが――――!!!!!!」

その叫び声は武蔵じゅうに響く、その涙は・・・雨にかき消されて
いった。

第5話 眞実（後書き）

結構自信ありげに描いた、頑張った

第6話 覚悟（前書き）

今回は最初に意外あの人登場

第6話 覚悟

武蔵アリアダスト教導院の制服を着込んだ黒髪の少年、冬樹・A・直貴は何もない、

ただ真っ白い景色に身を投じていた。

、上下左右がすべて真っ白の空間に立っていた。きよろきよろと周りを見渡し顎に手を当て考える。

ここは、何処だ？俺はいつたい、確か春香に気絶させられ、起きた後、番屋に怒られて、家に帰り・・・それから寝たから

「ここは……俺の夢の中なのか」

「そうだ、ここは君の夢の中、そして君の今の深層心理の中でもある。」

”誰だっ！”と周りを見渡すと真つ白な世界の中に一面赤く染められた扉が出現し、その扉を開けて男がはいってきた

男はロングコートにマフラーを巻き、首から金色の十字架を下げて

いるそしてその顔は直貴と瓜二つだった

「何者だお前は？」

「僕は夏目・智春、別世界の君さ・・・」

男、夏目智春と名乗った男は直貴の前に立ち舐めまわすように直貴を見ると溜息をついた

翡翠を呼ぶが来ない、もう一度呼ぶが影から翡翠が来る様子はない

（なぜだ！？）

啞然下顔でいるとクククと目の前の男が笑っている。そして

「無駄だよ、今の君では彼らを呼び出すことはできない。」

智春はそう答えると直貴に指を指し目を見つめ答える。

「今の君はホライゾン・アリアダストをまた失う恐怖に身を震えさせ何もしない臆病者だ！」

そんな今の君に機巧魔人達は扱えない、彼らも扱われたくもない
だろう」

智春はあえて直貴が考えたくない現実を言葉にする。現実を突きつ
けられた直貴は頭を抱えてうずくまり

智春を睨むと叫んだ

・・・俺は・・・俺は!・・・俺は!?

「ならどつすればいい!!俺は・・・どつすればいいんだ」

直貴の叫びに智春は

「その答えを・・・僕は知らない。知りたければ君が一番大切に思っている人物の所に行け。」

・・・僕が言えるのはそのことだけだ」

そう言つと直貴は再び入ってきたドアから歸つて行つた

最後の言葉

「大切に思っている人物の所に行け」

をつぶやくと顔をあげて白い空間に

「・・・・・・・・浅間・・・・・・・・」

と再び呟くとその場で目をつぶり再び闇に落ちる

s i d e 浅間

結局眠れたのは朝でした

昨日三河消失の事実が確認された後、暫定議会が行き交いはしたものの、一般市民は家にいることを警護隊から指示されていたからだ

だが私の家の浅間神社では、三河消失によつて消え去った三河側神社の権限の代行する確認や、更には警護隊からの要請により、流体の不協和による怪異に備える必要があつたため、神社の跡取りでもあつた私も処理に駆り出された

今私は朝の御祓の最中であつたがずっと気になっていた。直君のことだつた。

警護隊の人たちによると三河消失の際には武蔵に戻ってきていたと聞いた。だけどホライゾンを救う際にK・P・A・Itariaに反抗しそうになったところを自動人形である村山に気絶させられ、その後番屋に連れて行かれたと聞いた。

無事でよかったと思うが、やはりホライゾンの自害の事を聞くとその心情はとてもじゃないが言い表せないだろう

水を頭からかけ御祓を終わり、食事を取り少し早いが教導院に行こうと神社を出る。

すると神社の前に教導院の服を着た直くんが立っていて私は驚いた。

教導院は奥多摩にあるので直くんとは学校で会うはずだが

直くんは私が出てきたことに気付くと手を挙げて”よう”という

「悪いなこんな早くから、………ちょっといいか？」

私に手を出してきた

s i d e
o u t

場所は浅間神社、俺は智春の言うとおりに”一番大切に思う人”、
一方的だが浅間の事を思い、結局神社まで来ていた

「なんで居んのかな？俺」

髪を左手でかき上げ呟くと、向こうから長い髪をなびかせた浅間が
こっちに気付き近づいてきた。

「よお」

「直くん！？どうしたのこんな早く？」

「悪いなこんな早くから、・・・・・・ちょっといいか？」

手を浅間に向けだすと浅間も” うん ”と手を握ってきた。

そしてしばらく三河の事、日常の事などを話しながら歩く、なるべく明るく浅間に気を使わせないように

気おつけながら浅間神社から奥多摩までそんなたわいもない話が続いた。

そして後悔通りと呼ばれる道の目の前で立ち止まった

浅間は何やら心配そうに俺に目配りをしてくるが俺は”大丈夫”と
いうと後悔通りに足を進めた

後悔通りに入ってから何もしゃべらなくなった俺と浅間は木陰が御
生い茂る道の端にある石碑の前に立っていた

その石碑を見た瞬間、俺の中にある感情の枷がすべて外れてしまい
浅間を抱きしめていた。

浅間もいきなり抱きしめられたのでびっくりしていたが直貴の顔が

ぬれていることに気付くと逆に抱きしめた

俺はこらえきれなかった自分を攻めると同時に自分の中の悔しさを
嗚咽を吐いた。

「俺・・・は・・・何もできなかった！！、10年前、ホライゾンが
！！・・・死んだ時も！！・・・

何も出来なくって・・・今回も！！・・・前と違って・・・力が在っ
たのに！！、彼女を・・・

彼女を救えなかった！！、俺・・・もうどうしたらいいのかわか
んねえよ！！！！」

泣きつく俺の顔を浅間は自分の胸に抱き子供を泣き止ますように髪をなでる

やわらかい胸の感触が俺を包むそして、やさしい温かい言葉が俺を包んだ

「直くんがやりたいようにすればいいのよ。だってあなたのことだもの大丈夫よ、直くんは何がやりたいの？」

浅間のやさしい問いに答えようと顔を上げる

「俺が・・・何を!？」

その瞬間、影が9つに割れた、割れた影から9体の魔人が姿を現す。

その中には昨日戦闘で呼び出した翡翠らも入っていた。

驚く浅間と俺だが機巧魔人は俺をその緑の瞳で見つめる。

正直、こんなことは初めてだった。だが機巧魔人たちは主である直貴を見つめる

その瞬間、俺は感じた。その瞳の示す意味を、

（まさか！、こいつらは俺の言葉を待っているのか？だが、何故？）

機巧魔人は現状、俺の内燃排気で動いている。そのせいで自らの意志と呼べるものがほとんど存在しない

はずである

だが、今俺の排気は使われていない、そして俺はあいつらを呼び出していない。

つまり

「お前らには……意志があるのか!？」

直貴ははっと顔を上げその瞬間、夢の中で聞いた智春の音がフラッシュバックのように頭の中によみがえってきた。

（今の君はホライゾン・アリアダストをまた失う恐怖に身を震えさせ何もしいていない臆病者だ！

そんな今の君に機巧魔人達は扱えない、彼らも扱われたくもないだろう）

そっだ、こいつらは俺の答えを、俺の意思を聞きに自らの力で現れたんだ。

俺は涙をふき払い、浅間に向き大丈夫と告げる

「ありがとう浅間、俺解ったよ、今俺がしなくちゃいけないことが」

浅間もニッコリ笑う

そして俺は俺を見ている機巧魔人達の方を向け叫んだ

「俺は、ホライゾンを救いたい!!、だが俺には救える力はない。」

200

・
・
・
・
・
だから！
・
・
・
・
だから！！

「お前たちの力を貸してくれ！！我が機巧魔人達よ！！」

俺の叫びを聞くとその答えに咆哮を上げ、一斉に機巧魔人達は俺に跪いた。

ある者は槍を掲げ、ある者は剣を掲げ、主の言葉に敬意を表し、その身を再び影の中に沈めて行った。

再び浅間の方を向くと彼女の目を見つめ、そして

「俺はホライゾンを救うよ浅間！！、必ず、もう二度とあんな思いをしないためにも！！」

だからもう失わない・・・・・・今度こそ！！

第6話 覚悟（後書き）

正直今回は駄作かも

第7話 答え

場所は武蔵アリアダスト教導院

この二階にある梅組の教室、何時も騒がしいはずの声は今聞こえない

そこに向かう途中の廊下に今制服を着た黒髪を揺らしながら教室に向かってくる浅間・智

そして黒髪を揺らし目の下にクマと泣いた後を残し、浅間の隣を歩いている冬樹・A・直貴が

梅組に向かって歩いている。

「さすがに、みんないませんかね」

「いや、・・・・・・・・どうかな？」

浅間の返事に顔を打つ向きながらしゃべる直貴。彼の顔は真っ赤に染まっていた

（女の子に！、しかも、自分が好いている子に泣きつくってどんだけだよ俺！！）

直貴は心の中で呟きながら歩いている。

そんな直貴を気にも留めず浅間は話しかけてくる。

そして、梅組の教室の戸を開けるとそこには上半身うつ伏せになって寝ているトーリや

表示枠を叩いているネシンバラや他数名のクラスメイトの姿は見え
た。

「葵君は居残りで説教食らったんだ、直貴君は・・・やっぱり朝
まで？」

「ああ！本当にウザったくてよあの番人！！、不可抗力だって言っ
てんのに聞きやしねえ」

あははつと苦笑いを浮かべるネシンバラや他のみんな

だがみんなも少なからず目にクマが出ていた。おそらく眠れなかつ
たか、説教食らっていたかだろう

ネシンバラが強気の瞳を直貴に目配せすると直貴も頷いて返す

「じゃあ、みんなが揃ったら決めようか、この教導院の、いやこの武蔵はこれからどうしたいのかを」

その後、 8 時 4 5 分、 武蔵アリアダスト教導院・梅組

梅組ではほとんどのクラスのメンバーが集まっており、いないのは正純、ネイト、直政、東、ミリアムと事情で来れないメンバーだけだった

「とまあ、ぶっちゃけ、正純は暫定議会、ネイトは領主部会に、直政は機関部会に、

東とミリアムは警護隊に警護されてて出ること叶わず。」

一瞬トーリの方を向くがうつ伏せになって動かない。

「まあ、あいつの事は良いとして、現状三河が消失し、極東君主である元信公が死んだことにより

その嫡女であるホライゾンがすべての権限とともに三河消失の責任を取らされ自害することに

決定している。」

直貴はいやな顔満々で言うが、それに点蔵が手を上げる

「点蔵何？質問？ちなみにエロゲーの質問はトーリに後でしろ」

「わかったでござって！違うう！！違うで御座るよ！自分こんな時にそんなこと考えないで御座るよ！」

「わかったわかった、んで何？」

「これからというもの、具体的にどう動くかで御座るが、何か名案が？」

「んなもん！ホライゾン救いに行くに決まってるだろ。」

堂々と胸を張り点蔵の質問に答えるが、みんなその答えに落胆したように肩を落とす

「んだよ、じゃあお前らは救いに行かねえのか？」

「判断材料を先に言え」

ノリキが顔に張ってある絆創膏をいじりながら言う

クラスのみんなもうんうんと頷く。直貴はめんどくさそうに髪をクシャクシャいじるが応える

「良いか現状この武蔵のすべての権限が今、ホライゾンの元にある。この武蔵所有権もだ

だが、これ等を持ったまま、ホライゾンが死んだらどうなると思う？」

これに反応したのはトーリの前の席でファッション雑誌を読んでいる喜美である

「いちいちめんどくさい言い回しで言っのやめなさいよ、この巨乳好き！」

「関係ないだろ巨乳好きは！！って余計な御世話だ」

「なら答えなさいよ！、ホライゾンが死んだらどうなるの？早く言わなければあんたの秘密をばらすわよ」

「ばらすなよ！！、まったく！良いかホライゾンがいなくなれば持っている権限は聖連にすべて持ってかれる」

つまり

「完全に極東は聖連に支配される事を意味する!!」

教卓を叩きその眠そうな顔を無理やり引き締めるが……やは
り眠い

浅間の方に向き

「浅間、聖連は略式相続確認を行ったんだよね？」

「jud、確かに聖連は簡単な確認を行っています、今朝浅間神社にその報告が来ました。」

「あの陰険教皇の事だからすべて承知の上でやったんだろうがな・・・っち！胸糞悪い！」

舌打ちし、ますます気分が悪くなるが気にしている余裕はない

「まとめるぞ、このままホライゾンが自害し極東が聖連に持つてい
かれるか、ホライゾンを助け、聖連に逆らうことで、この極東の大
地を守るかだ。」

この話に降りるか降りないかは勝手に決める……ハイディ後頼
む」

ハイハイと直貴が自分の席に戻ると同時にシロジロの隣の席にいた
ハイディが前に出てきて今までの事を表示枠で複数操作しながら代
わりに教卓に立つ

「俺は寝る……全部終わったら起こしてくれ」

直貴は自分の席に座るとそのままうつ伏せになり意識を離した。

「直貴殿……随分苛々していたで御座るな。」

「無理もないよ……実際彼は10年前にホライゾンの死を目のあたりにしている。」

彼にとって彼女の死は10年前の絶望を蘇らせることに繋がるのだから。」

点蔵とネシンバラの会話にみんなが再び沈みこむ

そこに直貴の代わりで立ったハイディが笑顔でみんなにこう言った

「じゃあ、直貴君の言ったことでわかんないところを整理しようか」

表示枠を通信文の受信履歴を見ながらハイディがいない人物の動向を確認した

「さつき直貴君も言っていたけど東とミリアムは寮で警護隊に警護されているから安全

直政は機関部会での話し合い、この3人は良いけどミトと正純はちょっと厳しい立場にいるわね」

はい、とハイディの言葉に頷いたのは浅間だ。彼女もハナミが出した通信文の受信履歴を見ながら顔を曇らせていた。

「ホライゾンが自害すると武蔵の住人が江戸の居留地に移住する際、暫定襲名していた水戸の松平家が本家に転嫁する訳ですから

聖連支配下となった極東の代表となって、私たちの主になるわけですから心情としては辛いですね」

うん、とハイディも肩をすくめる

「正純の方も今や私たち生徒会と総長連合の中で唯一権限を持っているのよね、副会長権限」

「父君が暫定議会の議員で御座るからな・・・」

点蔵が、腕を組んで椅子に浅く腰掛けながら、言葉を続ける

「暫定議会からしてみれば、話の通じやすい生徒会の人間が居れば楽で御座ろうから」

点蔵の発言にみんな言葉が出ない。

ハイディは目の前で仕事をしているシロジロに声をかける

「ねえシロ君、そろそろいいかな？」

「私に何か？」

「jud 商人としての、例えば経済的な面での話が聞きたいな、
って」

「しかし、そう言われてもあまり乗り気ではないのだがな、まだ仕事
が忙しくて」

「だけどシロ君、これってビッグビジネスのチャンスかも知れない
んだけど？」

するとシロジロは姿勢をただし、ハイディの頭にいたエリマキが前
足を上げると

シロジロの頭の上に金策メーターと書かれた表示枠が現れ一気に5
ゲージ位たまり直も進行している

「金か！、ビッグビジネスか！！、うむ！いいなそれは！、金か！
金だな！

つよし、思考もスッキリだ！貴様らよく聞け！」

シロジロはいきなり立ち上がると教卓の向こうに立つとこう言った

「貴様らよく聞け！これから私の大好きな金の話をする！！」

「「「「「最悪だよ！お前！！」「」「」「」

「うるせえぞお前ら！もうちつと静かにしろ！」

シロジロに突っ込んだみんなの音がうるさかったのか、眠っていた直貴が起きてそのまま立ち上がると

フラフラとドアに向かって歩き

「……………うるさいから屋上で寝てる。終わったら起こして」

と言うと直貴は教室から出て行った。

シロジロはそんな直貴には目もくれず

「今、私たちは、……………現状、君主であるホライゾンの命と、武蔵を代価にして、自分達の身の安全を聖連相手に買おうとしている。それが私たちにとっての現状だ。」

一方屋上では教室がうるさくて眠れなかったためここに来て寝ていた直貴がいた

しかし直貴は寝ておらず空をずっと眺めていた

(・・・・・・・・戦争か・・・・・・・・)

ホライゾンを手助けしようとするれば戦争になる。そうすれば俺は仲間を守るのか

目をつむり、溜息をつきながらそんなことを考えた。しかし

「戦わなければ……ホライゾンが死ぬ……そして、戦えば仲間が死ぬ……俺は」

（ならば君が守ればいい。その為の機巧魔人ではないのかな）

突然、声が響き渡る。直貴は、は！、と身構えるがそこは教導院の屋上から見える風景ではなかった

そこは何もない白一面の世界、そこに夏目・智春が一人立っていた。

「やあ、君の覚悟は聞かせてもらった。その覚悟は機巧魔人達も納得したようだ」

「なら何の用だ、今お前にかまっている暇はっ！……何のつもりだ」

直貴の言葉は最後まで発せられなかった、智春が一瞬にして移動し直貴の首筋手前に剣を突きさしているからだ

しかも、手にしている剣は

「!!!?、貴様！何故”鋼”の剣を持っている!!!」

機巧魔人”鋼”の使用する剣であつたからである。

「・・・まだわからないのか、俺は」

その言葉は人間の声ではなかった、何処か機械染みた声である。その瞬間智春の姿は消え一つの人形

それは人と同じ大きさの騎士の甲冑、鋼色の魔神が立っていた。その姿を見たたん直貴は震え、一步後ずさりしてしまった

「まさか!!!?・・・お前が・・・鋼だつたのか!」

鋼はその瞬間剣の切先をこちらに向け、機械の声で言葉を発し、構

える

「・・・・・・・・力を・・・・・・・・見せる!!」

その瞬間目の前に現れた鋼は震えている直貴を上から切りつける。

直貴も瞬時に思考を切り替えて”白銀”を纏い上段から来る剣を右手に持っている剣で相殺する

剣がぶつかり合い、白い世界に火花が散り、金属の打ち合う音が聞こえる。

鋼はその猛攻をやめない、剣を何度も何度も振り上げこちらにぶつけてくる

直貴も”白銀”の剣で受け流したり、逆に切りつけたりしている

「何故だ！何故、ここでお前とたたかう必要がある!!、答える！鋼!!!!」

だが鋼は答えない、後方へ跳躍するやそのその右手から拳を覆うく
らいの重力球を直貴に連射してくる

直貴も腕をクロスし防御の体勢をとるが後ろからいきなり衝撃を受
け更に重力球を食らってしまう

「がつ！！・・・な・ら・ば、これでどうだ！！」

闇より深き深淵より出でし―其は、科学の幻影^{かげ}を裁く剣！

直貴は機械染みた声で呪文を唱えると右手に持った剣が魔法陣を描
き輝き始める、

直貴は一撃必殺の白の剣戟を繰り出そうと構える

が対する鋼も腕を高く上げを構え、呪文を唱える。

闇より深き融炉より出でし―其は、科学の鎚が鍛えし玉鋼

そして白銀の剣戟と鋼色の重力球が激突した。

激しい爆音と重力異常が起こり空間がゆがむが、煙をかき消し鋼色の重力球が白銀の鎧を着た直貴を襲う

鎧は碎け散りボロボロにされ白銀の鎧が解かれ生身の直貴がさらされる

「クッソ！！鋼エエエエ！！」

直貴は鋼をその紅い目で睨むが鋼は一步も動かないそして

「…………お前の本来の戦い方はそうではないだろ……………」

機械の声でそうつぶやく、直貴は鋼の問いに疑問を浮かべる

「?・・・俺の戦い方?・・・」

「お前の戦い方は機巧魔人を鎧として装備し、真正面から戦う近接戦闘じゃないだろ」

はっ！と鋼の声に気付かされた直貴はよろよろと立ちあがり

「来い!? 鐵!」

今度は?鐵を鎧として装備するがそれだけでは終わらない

「目覚めろ、薔薇輝!、出ろ、機巧魔神・翡翠!、開演だ、蒼鉛!」

更に三体の機巧魔人を鋼と同じ人型サイズに呼び出す

直貴の行動に鋼は、フッ、と声を上げ、剣を構えて突っ込んでくる

「床を凍らせる翡翠！、薔薇輝は足場が不安定になった瞬間、鎖で鋼を拘束しろ！、蒼鉛は二体の援護に回れ！

とらえた瞬間、俺が黒の拳戟を叩きつける」

三体の機巧魔人は直貴の指示に従う、鋼は空間切断を使い一瞬で距離を飛ばし、直貴に剣を振り下ろすが

直貴は白刃取りの要領で剣をつかむ

「今だ！！」

直貴が叫ぶと、翡翠が魔法陣を展開し床ごと鋼を胸のあたりまで凍らせる

そこに薔薇輝が6本の鎖で鋼を拘束し自由を奪う

鎖を破ろうと重力球を展開するが、蒼鉛が鋼の腕に向かって槍を突きさし、槍の回転で重力球を拡散させ消滅させる

闇より暗き深淵より出でし――其^そは、科学の光が落とす影！

呪文に気付き直貴の方を向くと、自分の拳の10倍位の重力球をその手に構えると鋼に向けて叩きこむ

「ウオオオオオオ！！喰らえ！！」

逃れようとするが薔薇輝の鎖と翡翠の氷が邪魔しているため直撃を喰らう

その威力は鋼の装甲を破壊し吹き飛ばすほどだった。

肩で息を吐き、？鐵を解くと煙が舞っている方を見つめる

煙が晴れ中からボロボロの智春が姿を現した。その顔は笑ってはいたが疲れ切っていた

「まさか、完成体である”俺が”ここまで遣られるとはね、見事だよ」

「・・・・・・・・褒められてもうれしくない・・・・・・・・」

もう敵対しないことを確認すると翡翠達を影の中に戻した。

「・・・・・・・・何故、試すような真似を・・」

直貴は智春を見つめる、智春は肩を下ろすと

「言葉だけじゃ、信用できなかったのさ。だから、俺自ら動いた。あのままだと、間違いなく君は死んでいただろうから」

「……………テストには合格かな？ 鋼」

意地悪気味の笑みを浮かべ、智春に向ける、智春も嫌な顔をし

「その呼び方は嫌いだね、今の姿では智春って呼んで欲しいな」

智春は、さてと、と言つと忠義の構えをとり叫ぶ

「ここに意思は揃った！！、我らが主に忠誠と勝利を！！」

すると真つ白い風景は一変して神殿の様な風景になり、目の前には大きい扉が在った。

智春は立ちあがるとポケットから写真入りのペンダントをこっちに
向け投げてきた

ペンダントを開くとそこには智春をもっと大人っぽくした男と、赤
ん坊を抱いて笑っているゴスロリ服を着た美しい女性とその肩にい
る氷でできた氷鳥が写っていた

「・・・・・・・・これは・・・・・・・・」

「預かりものさ。さあ！行きたまえ我が主よ、その扉をくぐれば外
に戻る

外では今結構やばい状態が続いているようだよ。」

智春が腕を上げると直貴の目の前に表示枠が出されそこには、K・
P・A・Itariaの男子制服を着た眼鏡の魔人族がウルキアガ
とノリキが彼にたたきつけられた瞬間であった

「ウツキー！、ノリキ！」

その光景を見るや否や扉に駆けだした。助けねばと思った瞬間体が勝手に動いたのだ

智春が後ろで叫ぶ

「忘れないで！君は一人じゃない！君には僕らが付いていることを
！！」

その言葉を背に扉を開け外に飛び出る直貴、

だがその顔は、笑っていた。

第8話 狼煙（前書き）

お待たせいたしました、色々悩んでいたらいつの間にかこんなにな
っていた

第8話 狼煙

直貴は屋上で目を覚ました。校庭の方では正純の声が響いている。

しかし、右手に何か持っている違和感があったので手を開いてみると、夢の中で最後に智春に投げ渡された渡された銀のペンダントが握られていた。

再びペンダントを開いてみると、やはり夢で見たと同じ三人の親子が写っていた。

「夢……じゃないのか？」

頭を回転させようとするが寝起きだからなのか上手く頭が回らない。だがそれも校庭の方で突然爆音が響き渡った

何事かと思い屋上から首を出すとK・P・A・Itariaの男子制服を着込んだ魔人族が武蔵の制服を着た半竜の学生と細い体をした学生を校庭に吹き飛ばし教導院をつなぐ橋に移動術で移動し右腕を振り上げた。

その右上の対象になっているのは男子学生服に身を包んでいる同クラス教導院の本多・正純だ

瞬間、直貴の判断は早かった。屋上の壁を蹴り上げそのまま右腕を振り落とそうとしている魔族に向かいその身を吐出させた。

「開演だ、蒼鉛！」

瞬時に蒼鉛を纏い右手に持っている回転ランスを高速で回転させる。その狙いは魔族の頭

しかし、もう数秒で正純にその拳が届く、正純が防ぐ術を持っていないことは同じクラスなので知っていた。

だからその注意をそらそうと直貴は叫んだ。仲間を守るために

「ヤメロオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！！！」

その叫び声に気付いたのか魔族は自ら持っている戦槌をランスに向け何らかの術式を発動する。

本来その戦槌、淫蕩の御身は正式な所有者でなくても接触した武器を無力化することができる

だが発生した術式はランスの回転に触れた途端に砕け散り火花を上げそのまま魔族の左手を襲う

魔族は咄嗟に移動術の術式を発動し距離をとり、直責は槍の回転を止めず正純を庇う形で魔族を睨む。

一瞬、後ろにいるクラスの人々を一瞥し、警戒し後ろ向きのまま言葉を囁む

「悪いみんな・・・・・・・・寝過した。」

「・・・・・・・・寝過すなよ！！て、言うか誰だよ！！」

「いや、この場にいないクラスメイトの事ぐらい分かるだろ・・・。」

皆頭を唸らせて誰かを当てようとする、そこに今まで傍観していた教師、真喜子・オリオトライが口を開く

「もしかして・・・直貴？・・・。」

真喜子の答えに皆がそろって顔を上げた。そうこの場にいないのは東達を除くとただ一人しかない

j u d とつぶやき、身に纏った”蒼鉛”を解く、そこには目を紅く染めてその先、魔人族を睨んだままこちらに向かって手を挙げている直貴が現れる

「まあ、状況が状況で良く掴めんがとりあえず名乗っておこう

武蔵・アリアダスト教導院所属、冬樹・A・直貴だ。」

直貴は自分を名乗り終えると目の前の魔人族に近づき、頭を垂れた。

その行動に周囲はざわめき、ガリレオ本人も敵の予想外の行動に驚く。直貴は頭を上げると苦笑いを浮かべ

「お久しぶりです、ガリレオ教授。いや昔のように先生とお呼びすべきですかね」

●

ガリレオは自分の顎に手を当て目の前の少年と何処で会ったか思い出そうとするが教師だったため色々な

人々と交流を持つため特定ができない。ガリレオは目の前にいる直貴に問う

「……何処かで、君と会っているかね？少年」

「やはり覚えていませんか・・・もう8年位前になりますよ・・・あなたと・・・・・・・・」

「……………教皇総長に会ったのは…」

8年前と聞いた瞬間、梅組のみんなとガリレオはそれぞれ別の意味で思い出し息をのむ。

そしてガリレオが言葉を発しようとするといきなり目の前に表示枠が出現する。

そこに映っていたのは白い長衣を纏い、椅子に浅く腰掛けている教皇総長、インノケンティウスだ

だがその表情は驚きと、戸惑いで表情が曇っていた。

しばらく直貴とインノケンティウスはお互い何も喋らずにいたがインノケンティウスの方は手が震えていた。しかしその緊迫した空気を直貴の一言が解いた。

「……………お久しぶりです、教皇総長。」

「……………ああ、8年ぶりだ。……………まさか、大きくなったお前の姿が見れるとはな……………予想外だったよ、なあ……………そう

だろ……。冬樹・アストライア・直貴！」

●

「アストライア!!？」

驚きの声を上げたのは同じクラスの中でも騎士であるナイト・ミトツダイラだ

彼女は叫ぶと同時に目の前にいる男を有り得ないというかのごとく凝視した。

「どっとうしたんだミトツダイラ!、いきなり声を上げて、アストライアって何？」

正純が驚きのあまり硬直したように動かず、直貴を凝視しているナイトの肩を左右に揺らす

硬直していたナイトも肩を揺らされ現実に戻ると横にいる正純やクラスの人々を見て口を開く

「・・・かつて武蔵には強大な力を持っていた騎士がおりましたのよ、力だけではなくその才覚は武蔵最高の騎士でしたわ・・・・・・・・・・」

「・・・だけどその騎士は突然と武蔵からその姿を消してしまったんですの、その騎士の名が・・・」

「そうだ・・・・・・・・冬木・アストライア・白雪・・・・・・・・それが・・・・・・・・俺の・俺の育ての母親の名だ・・・・・・・・」

「だが！お前の育ての親は酒井学長だつて！」

「違つんですよ正純・・・・・・・・直くんは白雪おばさんが居なくなつた後に・・・・・・・・酒井学長に引き取られたんす」

直貴の代わりに浅間が悲しげに言う。直貴は何か思い出すように話を進める。

「少し昔話をしようか・・・・・・・・俺が親父に拾われ、そして再び親父のもとに引き取られるまでの話を」

●

「そうあれは10年以上前、俺が武蔵に来た頃だ。無愛想な俺を引き取ってくれた女性がいた。黒い髪をなびかせた美しく、だがその意志は騎士そのものだった女性だ。」

「私達女騎士の憧れとも呼べる方でしたわ」

ナイトがその手を胸の前でクロスし昔を思い出しながら言った

「その女性は騎士だったが子供がおらず次世代にその力を受け継がせることはできずにいた。」

「なら！あなたが！」

ナイトの必死の叫びに下を向き首を振った。

「だから聞いたのさ、」僕を騎士にするために引き取ったの？」って、だけど母さんはニツコリ笑って首を横に振って言ったんだ、”お母さんは直君を幸せにするために引き取ったのよ”って確かに騎士にし、俺に後を継がせることもできただろう、だけど母さんはしなかった。普通に教導院に行き、浅間やトーリ、ホライゾンと遊んだり、怒られたり、騎士になるための修行見たいのは何一つしなかったな」

直貴は思い出すかのように空を見上げて喋った、笑っていたがその頬に一滴の涙を流し、浅間やトーリ

他のみんなも直貴の話を黙って聞いている。

「だけどあの事件、後悔通りの事件が起こり俺は記憶を失い、数か月後目が覚めたとき、母さんは泣いて抱きしめてくれた。だがその後、俺は当時のトーリみたいにふさぎ込んでしまったな」

トーリは当時の自分を思い返しているのか何時もみたいに冗談を振ってこない

浅間や他の皆も当時のことを思い返しているのか空気が重い。

正純が浅間の横に静かに移動し肩を叩く

「直貴ってそんなに酷かったのか？」

「jud、下手したらトリー君より酷くて、家のお父さんが健康回復の符なんかも渡したんですがだめでも1回武蔵がK・P・A・Itaria近くの寄港地に補給によった時、確か白雪おばさんと降りて行つて戻ってきたときには今の状態に戻っていたんです」

「そう、何か月も塞ぎ込んでいた俺にいきなり”教皇総長に会ってみる？お母さん昔、K・P・A・Itariaの教導院にいて知り合いだから”とかなんとか言つて無理やり教皇総長とこのガリレオ教授に会わせられたんだよ。」

そうですよね、と表示枠を見る、インノケンティウスも目を閉じて思い出していた。

「Tes、当時の俺もガリレオも忙しくてな、まあ同窓会のような感じで久々に白雪の奴に会ったらガキ連れだし、なんか塞ぎ込んでいるし、しかもガキを何とかしてくれっていきなり言われるから、呆れてものも言えなかった。」

「Tes、しかしそのあと元生徒、君は元女生徒とその子供の目の前で口喧嘩していただろう。私が止めに入らなければ、ぼこぼこにやられていたな君は」

う！とインノケンティウスの顔がゆがむが逆に直貴はクスクスと笑っている。

「とまあ、二人の喧嘩を見ていたら落ち込んでるのが馬鹿らしくなつてな、笑つてその教皇総長やガリレオ教授の励ましなどもあり、スツキリしたつてわけだ」

浅間や当時の皆は今の直貴の話を聞いて”あの時どうしていつも道理に戻っていたのか”納得していた。

だが突然直貴の口調が覚めていくことに浅間は気づいた。そして直貴は

「あの後暫くは良かった。楽しかったな・・・トーリも戻って・・・何時も通りに遊んで」

「・・・だけど、あの日、いつも通り教導院から戻ったら家は荒らされていて母さんは呼んでも出てこなくて・・・急いで部屋に行くと壁にはあの印が！・・・二境紋が書かれていたんだ！！」

直貴は叫びたい気持ちを抑え、唇を噛みしめる。全員意外な展開に驚きを隠せないでいたが一人だけ話の

最後に出た来た二境紋に反応が者がいた。正純だ。何故なら彼女も

母親を同じく失っているから

直貴は涙を袖で拭き、目を再び紅く染め表示枠に映るインノケンテ
イウスを睨み

「だからもう失いたくはないんですよ！その為なら・・・俺は！悪
魔にでもなる！」

「だったら、どうする？・・・姫の処刑まで時間がないが？」

「ならば！力ずくで求めるまでだ！！開演だ、蒼鉛！」

直貴は再び蒼鉛を纏い右手にあるランスをガリレオに向け回転させる。
インノケンテイウスは一瞬にやりと笑い

「ほざいたな！ガキが！、やれガリレオ！」

ガリレオの方も戦闘態勢に体を沈め、淫蕩の御身を構える。

再び、魔人族対機巧魔人の戦火が切って落とされた

●

最初に飛び出したのは直貴だ、ランスを腕と脇で固定しガリレオに向かつて突貫する

ガリレオも淫蕩の御身を掲げ通常駆動を発動させランスを止めようとするが通常駆動の発した術式は

先ほどと同じようにランスの回転にかき消されランスの回転と淫蕩の御身がぶつかり合い火花を上げる

「さすがですね！だがこのランスはすべての術式を無効化します！」

「ふむ・・・だからと言って君の勝利だとは言えないぞ少年！」

ガリレオは再び右手に術式を組み上げる、がそれに気が付かずに直貴はランスの回転を上げ無理やり押し込もうとする

「終わりだ！、K・P・A・Itaria副長！！」

「甘いのだよ少年！・・・“天動説”」

ガリレオの術式が発動し直貴の体がガリレオを中心とし回転しそのまま校庭に叩きつけられ、その口から少量の血が吐血し蒼鉛の鎧が解除される

その隙にガリレオは倒れている直貴の正面に移動しその右腕を叩き落とす。

遠くで浅間の悲鳴が響き渡る中直貴は起き上がろうとするが体が動かない

ここまでかよ、と思った瞬間だった直貴の陰から太い鋼色の魔神の腕が出現しガリレオの右腕を止める

「っ！鋼！？」

鋼は完全に直貴の陰から出ると空いているもう片方の腕でガリレオの腹を強打する。

「っ！！、なかなかやるな少年」

後方に吹き飛ばされながらも淫蕩の御身を杖代わりに自分の体を支えながら答えるガリレオに直貴は少し驚く、だがそれよりも目を細め自分を守るように立っている鋼を向き

「お前は出てくんのが遅い！なんでもっと早く出ない馬鹿！」

鋼の頭を殴る、だが鋼も直貴の方を向くと殴られた頭を摩りながらその姿を人間態、つまり智春の姿へ戻すと直貴をその肩で支える

「そんな言い方はないんじゃないかな、一応、助けてあげたんだが？」

「うるさい、だったらもっと早く助ける！……助けてもらったことには礼を言う」

「はいはい、でどうすんのこの状況」

鋼の言うとおり今の現状俺のダメージもでかいが相手もさっきのダメージが残っているはずだから

と思った瞬間ガリレオと俺の間に風が吹くとそこには三河・警護隊の装備を纏い、右手に槍を下げている

少女には見覚えがあった昨日三河であった。確か、彼女は

「極東、警護隊隊長、本多・二代」

俺たちの間に現れた二代は槍を構え戦闘姿勢で待機する。

告げられた名に別の方向から反応が来た。こちらに向かってくる正純と浅間だ

正純は一瞬こちらを向き会釈すると二代の方に、浅間は智春に支えられている俺の方にやってきた。

浅間はこっちに来ると直貴の背中に治癒の符を張りこちらの顔を覗き込むように話しかける

「直くん、お願いだから、無茶だけはしないで・・・」

「・・・・・・・・ごめんな。・・・・治癒の符、ありがとう・・・」

浅間はお礼の言葉に笑顔を浮かべ、俺も笑う。すると肩を支えてくれた智春が苦笑いを浮かべて

「あゝ・・・・・・・・お邪魔かな？」

智春の言葉に浅間は顔を少し赤く染め、直貴も顔を逸らす。その後、

教導院間の橋の間でざわめきが起こる。

なんだと思いそちらを向くとそこにはこちらに向かってくる武蔵王の姿だった。そんな武蔵王を見てトーリが橋の上から覗き込むような体制で

「おいおい！ 麻呂に、麻呂嫁かよ！？ 散歩か二人とも！」

「不敬な口をきくな！ 麻呂は、——武蔵王、ヨシナオであるぞ！」

ヨシナオは階段にいた撮影隊の横を妃の格好をした妻と通りこちらに向かって叫んだ。

「皆々、忘れてはいないか！ 未だ、総長連合と生徒会の権限は、麻呂が預かっていることを！」

「だからなんです、権限を使いこの臨時生徒総会を無かった事にしますか武蔵王？」

「その通りだよ冬樹君、それと、教皇総長、聞こえておられるのならガリレオ殿にお帰りいただきたい」

「ほう、ではどうすると言うのかなあ？ 武蔵王は総長連合と生徒

会決議の秘訣件を持つが、
学生ではないゆえ、学生抗争に参加することは出来ないはずだがなあ？」

「麻呂の警護に就いている警護隊長がおります」

成程、と思いながら直貴は智春の肩を返しひとりでに立ち二代を見た。先ほどから一步も動いていない彼女に対しガリレオは一步後ろに下がる。

「本多・忠勝の薫陶を受けた息女。大罪武装の試作品である神格武装の蜻蛉切を持っております。

それだけの武者に勝てるものがいるのかどうかを持って、諫めに入ろうと思います」

「勝ち負けに権限と変換の保持を委ねるのか。武蔵王、その方とその女武者と、

武蔵の学生がグルではないという証明は？ どうだ？ なあ？」

「教皇総長、それはいくらなんでも無理があると思いますが」

「言ってみただけだよ小僧、なら見してもらおうかな・・・戻れ、ガリレオ」

インノケンティウスは片手を無造作に上げ、ガリレオは一瞬でこの

武蔵から消えた

だが、問題は残っている。直貴は目の前の二代を睨むが反応がないので武蔵王に顔を向け

「では武蔵王、この場は我々の誰かと二代嬢を戦わせてその結果で決める解釈でよろしいですね」

「うむ」

「二代嬢は？いいですか」

「拙者は、……得意の移動術で三征西班牙の立花・宗茂に敵わなくてのう」

気持ちは分からなくもない、だが今はホライゾンの危機だ、どんな奴だろうと倒す！

そんなことを思いながら再びその眼を紅く染める。その時、今まで臨時生徒総会を見守っていた真喜子が口をはさむ。

「なんだか黙ってみてたけど正純と葵の相対は教皇総長の乱入とかもあったけど、双方、お互いに立つところがあると判断するわ。それでいいわね？」

二代が額で返すと次に撮影機材に視線を向け、向こうにいる教皇総長へ

「武蔵アリアダスト教導院の問題なのですから、他校の生徒は関与しないで下さいね」

『以後、気をつけよう』

J u d ・と真喜子が頷き、

「じゃあ延長戦。四回戦目に入りましょうか」

視線がまた二代へと向く。二代がそれに応じるように頷き、息をつく。

「拙者に勝てぬば、敵に刃は届かぬと知れ。もしそれが不可能ならば、夢も何もかも割断しようぞ！」

さあ、

「拙者の相手は誰で御座るか！？」

●

二代の相手を欲する呼びかけに再びクラス全員で円陣を組むように集まり、誰が行くかを話し合う。

「そうですわね．．．．．ここは騎士である私が出ましようか？ ドカンと一発」

「んー、あたしが地摺朱雀を空から落として不意打ちバコーンってのはどうかねえ」

「それより私が弓矢の遠距離射撃でズドンっていうのは」

「何でお前らは擬音系なんだよ」

「と言うか、僕が思うに、ミトツダイラ君や浅間君は武蔵王にたて突くのは立場として危ないと思うよ？

直政案も相手が不意打ちでどうにかなる相手だと思わないし。直貴君どう思う？」

ネシンバラが直貴に話を振り、直貴に視線が集まる。

「正直言つと今ここでまともに戦える奴はナイト、直政、浅間、点蔵、ナイト、マルガ、ネシンバラ

俺、アデーレだが相性、戦法、そして蜻蛉切の判断能力などの条件を考えると俺か点蔵に絞られる」

「なら自分いくでござるよ、勝てる可能性は低いで御座るが・・・」

「駄目だ、理由はキャラで負けているから・・・以上」

「なんで御座るかその自動人形風の区切り！後くだらない理由！」

「だって点蔵さ、二代嬢見ればわかるけどお前”自分、御座る”、相手”拙者、御座る”もはや負け決定」

直貴の言葉に現実を思い知らされた点蔵は自分から臥せってしまった。その口から”自分あそこまで出来ないで御座るよ”と悔しさ満点の声が響くが

そんな点蔵を捨てて考えた結果

「分が悪いが、ここは俺が行く」

直貴は自分が戦うことを告げる

第8話 狼煙（後書き）

次いつ投稿に何のか解らんが頑張るんで見とってや

第9話 出陣（前書き）

この回でやっとひと段落つきそう

第9話 出陣

「駄目よ！、大体直くんさっき怪我して治療している最中じゃないですか！」

「浅間……、だけど……」

「けどじゃありません！お願いだから……もう、心配かけないで！！」

浅間の叫びに一瞬ひるんでしまいが直貴の瞳は真剣なままである。
彼は浅間に近づきその頭を抱きかかえて喋る

「大丈夫だって無茶はしない……と言ってても信じてくれる」

「その前に君自身が戦わないことを言っただ方がいいんじゃないの？」

後ろ、輪の外側にいた智春がこちらに歩いて言う、智春の言葉にナイトが頭に？を浮かべ

「直君が戦わないってどう言うこと？ ナイちゃん良くわからないんだけど？」

「それもそうで御座ったが・・・それより・・・そちらの御仁は？」

「あつ！俺？、俺は夏目・智春。そこにいる直貴の機巧魔人の1体だよ。今は擬態しているけどね」

「機巧魔人？」

皆が頭をかしげる、直貴は浅間の肩を一瞬思いつきり抱きしめると智春を見る

「行けるか？」

「まあ人間相手なら大丈夫じゃない、さっきの黒鐵の打撃がまだ残ってはいるけど」

直貴と智春の話についていけない皆だが、ネシンバラが溜息をつき直貴に駆けよる

「話の流れについていけないんだけど、まとめると君じゃなくその人が戦うことになってるようだけど？」

「当たり前だろ、二代嬢と戦うのはこいつ。俺はこいつに流体を送るだけ」

「ちょっと待ってくださいませ！そちらの方は教導院の方ではないので相対は無理なのでは」

「いや・・・・・・・・できないはない。けど・・・・・・・・あり得ない」

ネイトの抗議にネシンバラが一瞬唖るが切り捨てる。後ろで暇そうに爪をといでいた喜美が直責を指さし

「もう！じれったいはね！その巨乳好き！なんでその黒服コートの男が出られるのか答えなさいな」

「・・・・・・・・反論できないのは辛いが・・・・・・・・まあそれは置いて、何故ならこいつは俺のものだからだ」

・・・・・・・・しーん・・・・・・・・と静まった。クラスの連中は再び

輪を囲むと

「なに！あいつそんな性癖だったの！これはもう同人誌にするっきゃないわね！」

「いやまさか、直貴殿がそのような性癖だったとは、自分巨乳好きと言うジャンルでは同じだったので仲よくしていたので御座るが・・」

「ひっ・・・ひどい！直くんそんな人だったなんて！・・・って言わないの浅間？・」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

「おい！お前ら！！凍らせんぞ！大体、意味が違っから・・・」

「「「「・・・・・言いわけだ・・・・」」」」

「本気で凍らせるぞ！ゴラ！？」

本気でキレたことが分かったのかクラスの連中は浅間を盾に後ろに隠れた。ただネシンバラだけは前に出て

「それは……その人が、君の流体を使って動いているってことだよね」

ネシンバラの回答に智春が思わず口笛を吹くが直貴に睨まれると体を竦め、ネシンバラの回答に後ろから直政がその右腕の義手を上げ直貴に質問する

「おかしいだろ？どう見ても人間じゃないさね」

予想通りだった直政の疑問に笑みを浮かべ

「まあ直政の疑問はもっともだ、なので実際に見てもらった方がわかるだろう……鋼！」

鋼の名を叫ぶと智春の体を濃密な闇が包み込む、皆は危険に思い後ろに下がるが直貴はそのまま動かない、闇の中から機械声と歯車の軋む音が響き渡る。

（闇より深き融炉より出でし―其は、科学の鎚が鍛えし玉鋼）

召還呪文が唱えられ濃密な闇が渦を巻き霧散するとそこには智春の

姿はなく代わりに立っていたのは

鋼色の騎士の甲冑を模したデザインの魔人だった。

下がったクラスの皆のほかにその光景を見ていた武蔵王や二代、全員はその光景に驚きが隠せないでいた

「此奴が俺の力、俺の武器、俺の防具、機巧魔人だ……鋼！」

鋼は直貴の声に頷くと二代の目の前まで直貴の腰を持ち跳躍し、直貴は鋼に聞こえるような声で

「50%だ鋼！、それと重力操作はするなよ、あんまし怪我されても困る」

鋼に指示を送る鋼もその指示に頷き目の前の二代に構える

「うおー！なんだそれ！チョーカッコいいじゃねえか！ロボットか？合体すんのか！」

トーリが橋の上から馬鹿もとい我らが総長であるトーリが鋼をキラキラした目で見ている

直貴はトーリに向かって呆れのため息をつく

「しねえよ馬鹿！、・・・トーリ」

けどなんでかな、此奴のためなら

「ん？なんだ、やっぱ合体すんのか？」

頑張ってみるのもいいかもって、思っちまうんだよな

「ちげーよ、どっちが勝つと思う、俺か二代嬢か」

「そんなの決まってんじゃねえか・・・お前だよ」

「なんで？」

「俺馬鹿だからわかんねえけどさ、お前とは付き合い長いから負けてほしくないんだ」

トーリの負けてほしくないという言葉に笑ってしまった。俺は俺が勝つ理由を聞いたんだけどな

「だったら、お前の期待に応えてやろうじゃねえか、なあ！鋼！！」

鋼が機械の咆哮を上げる。二代に対し剣を構える。二代も蜻蛉切を構え

「参る！」

来る前方から右足で踏み込み蜻蛉切の刃が鋼を襲う、鋼はその刃をぎりぎりの範囲でかわすが二代はそのままかわされた蜻蛉切の刃を左斜め上から威力を殺さずに直貴に振りかざす

これで終わりで御座ると思う二代だがその刃は振り落とした瞬間、蜻蛉切の刃が弾き返されそのまま自分ごと後ろに飛ばされる

なにが！っと思い二代は前を見ると先ほどこちらの攻撃をかわしたはずの鋼が主を守る体制で前に立っていた。

「ならば、これで如何で御座るか！」

二代は再び体を低く沈め“翔翼”を使い高速化する。蜻蛉切を構え鋼を槍撃する。

鋼も迎え撃とうと剣を構えるが、二代はどんどん速度を上げて行き、すでに12もの残像が鋼に向かい一斉に蜻蛉切を突き刺そうと狙う。だが鋼は12もの槍撃を剣や拳を使いすべてしのぎ切り、12撃目を凌ぐとカウンターに己の拳を二代に放つ

二代も咄嗟に蜻蛉切で受け流そうとするが力の差は先ほど吹き飛ばされたことより完全に鋼の方が上である。

威力を殺し切れずにまた後ろに吹き飛ばされ、体制を立て直そうとするがいきなり後ろから衝撃が走り二代は教導院の壁に激突する

「な、なにが 起ったで御座るか!？」

二代は顔を上げると自分が飛んだ先に拳を構えていた鋼がいた。

馬鹿な!と二代は思ってしまった。自分を吹き飛ばした本人が吹き飛ばされた自分より先に落ちる地点にいるなどありえない

だが現実はそうではない、実際に鋼は移動している。二代は埃を払い再び構えるが再び加速し鋼に対し右から蜻蛉切を振りかざすが鋼は振りかざす二代に対しさらに右から剣を振り落としている

やはり・・・二代は蜻蛉切の伸縮機構を使い石突きで鋼の剣を吹き飛ばし右足を軸にそのまま蜻蛉切を振りかざす

鋼は後方に飛び上がると飛ばされた剣を空中で取り戻すが、下で二代が鋼を蜻蛉切の刃に写しこむ

「空中では避けられないで御座ろう！結べ、蜻蛉き」

割断を叫ぼうとする二代だが後ろから飛んでくる鎖に巻かれ動きを止める。地に降り立った鋼が動かない二代の首筋に突き立てる

鎖が二代の体から離れ二代が再び動き出すが自分の首筋に先ほどまるで空中にいた鋼の刃が寸前で止まっていることに息をのんだ

「・・・・・・・・！？、いったい何が・・・・・・・・」

二代の疑問に首筋から剣を下げる鋼。さらに二代の背後から声が響く

「とりあえず槍を下してもらってもいいかな？」

後ろを振り向いた二代の目に映ったのは薔薇輝を纏っている直貴だった。右腕には先ほど二代を絡めた鎖が垂れ下がっている

二代はそれを見て崩れ落ちた。鋼ばかりに気をとられ後ろにいる直貴のことを放置した結果だからだ

崩れ落ちた二代に薔薇輝を解いた直貴が近づき、傷ついた彼女に回復の符を張り問うた

「あんたは何で戦うんだ？。あんたは何のために戦うんだ？」

「拙者は、この極東のために「違うだろうが！」「っ！？」

「極東の侍は極東の君主のために戦うんだろ！その侍が自分の君主自殺を強行する奴らの側に行くのか？ふざけんじゃねえぞ！？」

二代は直貴の言葉に唇をかみ、そしてその瞳は悔しさで泣いていた。そして直貴はそんな二代に手を伸ばす

「行こうぜ！一緒に、俺たちの姫を助けによ」

二代は直貴の手をつかんだ。その瞳には迷いはなく、はつきりとした意志が灯っていた。

「拙者の・・・負けで御座る・・・そして、直貴殿には・・・大切なものを教えていただいたで御座る

力強いお言葉 忝いで御座る」

「働きで返せばいいさ、さて」

そう言つと直貴はヨシナオの方に向き直り

「残念なことに俺の勝ちだが、どうします？」

その問いの答えより早く、空から別の声が響き渡る

「そうだなあ。・・・聖連から派遣された武蔵王が、これからどんな判断する気だ？さあ答えてもらおうか武蔵王、お前の判断を」

ヨシナオはしばらく目を閉じ自分の考えを纏めていたが決心したのか妻が握っていた手を離し一步前に出ると皆に聞こえるように叫んだ

「・・・約束どおり、総長連合、生徒会の権限はそれぞれに戻す、さらに、

ここで葵・トーリの生徒会長権限を剥奪し新たに、冬樹・A・直貴を新たな生徒会長に任命する」

王の言葉に歓声が上がりいきなり生徒会長に任命された直貴は驚きのあまり啞然としていたがクラスの皆の拍手により我を取戻しヨシナオに向けて叫ぼうとするがその前に両肩を叩かれ前を見るとトーリが

「すごいな相棒！生徒会長か！スゲーなおい！やったじゃねえか！
・・・あでもよ、生徒会室にある俺のエロゲーだけは捨てないでくんね！頼むよ！浅間風の巫女さん巨乳が出てくるやつ進展するからさ！」

「お、お前ってやつは・・・相変わらずだなおい・・・反論する気も無くなっちまった・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・一ついただいておこう」

トーリと直貴はお互い固い握手で改めて友情を認め合いそしてヨシナオに振り向き

「了承した！ならば私、冬樹・A・直貴！ありがたく生徒会長の座をいただき、よりいっそ励むことを誓おう」

その答えにヨシナオは頷き、周りからは盛大な拍手が注がれた。

だが再びヨシナオの声がその歓声を打ち消すように追加され

「だが！・・・王権の移譲は出来ん！　これは姫ホライゾンが戻
つてきても同様の事。

武蔵は聖連からの派遣による武蔵王、このヨシナオを王とするもの
である！

しかし、末世解決の責を負うに当たり、麻呂は補佐として副王を二
人、副王補佐を一人

副王には極東の代表であるホライゾン・アリアダストと武蔵アリア
ダスト総長、葵・トリー

そして副王補佐には生徒会長である冬樹・A・直貴を任命する」

つまり

「実質上、武蔵の学生達に王の権限を分権すると言うことか武蔵王
！！」

「王の否定権は存続しております聖下。何しろこの先の責務におい
て、麻呂の身に万が一のことが起こつても、即座の判断が必要と
なるでしょう。」

そのためには副王を補佐とし副王補佐をさらにその補佐と置くの
が順当」

「……狂ったか！？ いや、感傷に酔い、学生に取り込まれたか武蔵王！」

「聖下」

ヨシナオは膝をかがめ、頭を下げながら

「いやしくも麻呂は武蔵という小国の王でもあります。K・P・A・Itariaの代表である聖下とは学生の身分でないため相対はできませんが、立場としては同等。先ほどのお言葉はお戯れとして受け流させていただきます」

次に歯ぎしりしインノケンティウスは直貴の方に顔を向ける

「お前はどうかんだ副王補佐兼生徒会長！お前の母親はそんなことを、聖連に逆らっても、良いと教えたか？」

直貴はインノケンティウスの問いかけに笑いを殺し肩を震わせる。

「確かに母さんは騎士だ、聖連に逆らうことは決してしなかっただろうっ」

「ならば――」

「だがな……教皇総長、今回の処刑はあんたの判断であり、聖連全体の意志ではない！」

母さんだったらそんな時”迷わず、自分を信じなさい”と言ったはずだ！ならば俺は

あんた等の処刑を認めない！命は何にだって一つだ！そして今失われる命はあんたが如何こうしてもいいものではない！」

「つく……さすがに白雪の息子……か、だが！それならば武蔵は各国と戦争しながら大罪武装を集めるのか？おい？」

世界政治などにほとんど詳しくない直貴だがその肩を誰かが叩く。正純が直貴の前に出ると

「聖譜記述の最後の更新となる記述会議、欧州初とも言える政治的国際会議であるヴェストファーレン会議があります」

「ならば武蔵はヴェストファーレンまで聖連との全面戦争を行うわけだな。なあ？　おい」

くくくと笑い椅子から立ち上がり腕を振るインノケンティウスは力メラに向かい

「もはや面倒なのでいうが、聖連の代表として、武蔵の判断には危機を感じる。

大罪武装保持と、歴史記述の再現性を損なうこと。そして三河の現地回復において

K・P・A・Italiaは現地での解決を重んじ、当初の予定

通り、ホライゾン・アリアダストの自害と、大罪武装の抽出、そして三河回復のための武蔵 移譲を進めることとする」

「そっか、じゃあそっちはそっちで頼むは……俺はホライゾンにコクリに行くよ」

「貴様……！」

「戦争ってことだな、あんまり死人は出さないようにするが大丈夫か智春」

「出力押さえればいけるでしょ……でもいいのもう引き返せないよ」

「いまさら言うか、んなこと。もうとつくに覚悟は出来てるよ」

「……そっか、じゃあ俺は戻るけど力が必要になったら呼んで」

智春は直貴の陰の中に沈み、直貴は再びインノケンティウスを見上げる。

「警告しよう！ こちらは予定通り進める。干渉すると言うならば、校則法に基づく相対が生じると思え。」

「……残念だよ、白雪の息子と戦うことになるなんてな」

その言葉とともに、表示枠が消える。直貴は消えた表示枠の場所を眺め

「・・・・・・・・いまさら遅いんだよ・・・・・・・・オツチャン」

そして、消えた表示枠の代わりにホイッスルの音が鳴り響く、笛の音色は長く遠くに届き、最後にオリオトライの声が響き渡る

「相対は、——武蔵アリアダスト学院側の優勢とします！ 関係者各位、全て、当初の取り決めに遵守して行動してください！これは聖連の認可の元で証明される物であり、三河君主、ホライゾン・アリアダストの奪還を極東の判断とします！」

こうして物語は次の戦へと進む

第9話 出陣（後書き）

戦闘シーンって結構難しいんですね、自分で書いて初めてわかった
これからも不定期で投稿しますがよろしく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3704y/>

境界線上の機巧(人形遣い)

2011年12月3日16時53分発行